高崎市文化財調査報告書　第284集

飯塚・貝沢堀添遺跡

— 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2011

高崎市教育委員会

例　言

1　本書は、群馬県高崎市飯塚町字貝沢堀添 293 番地 1 に所在する「飯塚・貝沢堀添遺跡」（高崎市遺跡調査番号 494）の発掘調査報告書である。
2　調査は、集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した。
3　発掘調査から整理作業を経て、報告書刊行に至るまでの一連の作業は、横山 司甫氏の費用負担によって行われた。
4　発掘調査及び整理作業は、高崎市教育委員会の指導･監理のもと、有限会社 高澤考古学研究所が実施した。
5　調査体制は、以下の通りである。
　高崎市教育委員会文化財保護課　田口 一郎・須田 奈保子・滝沢 匡
　有限会社高澤考古学研究所　澤田 福宏
6　発掘調査は、平成22年11月15日から平成22年12月17日までの期間で実施した。調査面積は187.56㎡である。
7　本書の編集は、有限会社 高澤考古学研究所の澤田 福宏が行った。執筆は、Ⅰを田口が、それ以外を澤田が行った。
8　基準・水準点測量及び遺構平面図測量は田中 隆明・山際 哲章に委託した。
9　遺構及び遺物撮影は、澤田が行った。
10　発掘調査及び整理作業に従事した者は、以下の通りである。（敬称略、50 音順）
　岩倉 保・岩倉 洋子・兼田 賢章・小林 貴子・澤田 美枝子・澤田 恵美・吉田 文子
11　発掘調査から報告書刊行に至るまでに、下記の機関に協力を賜った。（敬称略、50 音順）
　大東建託 株式会社・文化財整理 こうけん・山下工業 株式会社
12　発掘調査により得られた資料及び出土遺物は、一括して高崎市教育委員会に保管してある。

凡　例

1　遺構挿図中に使用した方位記号は座標北を、水準線は標高を示す。座標は国家座標Ⅸ系を使用した。
2　土層注記の色調は、農林省農林水産技術会議事務局（財）日本色彩研究所監修「標準土色帖」を使用した。
3　本書で使用した地図は、第 1 図が国土地理院発行数値地図 1/25,000 地形図「高崎」「富岡」「前橋」「下室田」を合成し、1/30,000 に縮小したものを使用し、第 2 図は国土地理院発行数値地図 1/2,500（高崎市都市計画基本図）を使用した。
4　掲載図の縮尺は、各図に示した通りである。
5　第 4 図で使用したスクリーントーンは谷部の範囲で、第 14 図は赤彩部の範囲である。
6　遺物実測図の縮尺は、1/3 を基本とし、異なるものは各挿図中に縮尺を記した。
7　本書で使用した火山噴出物の記述は以下の通りである。
　As-BP　……　約 2 万年前降下「浅間板鼻褐色軽石群」
　As-YP　……　約 1 万 3 千年前降下「浅間板鼻黄色軽石」
　As-C　……　3 世紀後半降下「浅間 C 軽石」
　Hr-FA　……　6 世紀初頭降下「榛名二ツ岳火山灰」
　Hr-FP　……　6 世紀中葉降下「榛名二ツ岳軽石」
　As-B　……　1108 年（天仁元年）降下「浅間 B 軽石」
　As-A　……　1783 年（天明 3 年）降下「浅間 A 軽石」

例言・凡例・目次

例言・凡例・目次
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　調査の方法と経過……1
Ⅲ　遺跡の地理的環境と周辺遺跡……2
Ⅳ　基本堆積土層……5
Ⅴ　調査の成果……6
Ⅵ　まとめ　……15

挿図・表目次

挿図・表目次
第１図　周辺遺跡図（1/30,000）……3
第２図　遺跡位置図（1/2,500）……4
第３図　基本堆積柱状図……5
第４図　遺跡全体図（1/150）……6
第５図　竪穴状遺構 平・断面図（1/60）……7
第６図　１号井戸 平・断面図（1/60）……7
第７図　２号井戸 平・断面図（1/60）　遺物図……8
第８図　１～３号土坑 平・断面図（1/60）……8
第９図　１号溝　平・断面図（1/60）……9
第10図　２号溝　平・断面図（1/60）遺物図……9
第11図　３号溝　平・断面（1/80）遺物図……10
第12図　４号溝　平・断面図（1/60）遺物図……11
第13図　包含層　平・断面図（1/60）遺物図……12
第14図　包含層　遺物図……13
第15図　遺構外遺物　遺物図……15

第１表　周辺遺跡一覧表……4
第２表　２号井戸　遺物観察表……8
第３表　２号溝　遺物観察表……9
第４表　３号溝　遺物観察表……10
第５表　４号溝　遺物観察表……11
第６表　包含層　遺物観察表……14
第７表　遺構外遺物　遺物観察表……15

写真図版

PL.1
調査区遠景　南西から
調査区垂直全景　上が北

PL.2
表土除去状況　西から
遺構検出状況　西から
竪穴状遺構確認状況　西から
竪穴状遺構Ａセクション 南西から
竪穴状遺構Ｂセクション　北から
竪穴状遺構完掘全景　南西から
竪穴状遺構全景　垂直
１号井戸全景　南から

PL.3
２号井戸セクション 南西から
２号井戸遺物出土状況　南西から
２号井戸全景　南西から
１号土坑セクション　南から
１号土坑全景　南から
２号土坑セクション　南西から
２号土坑全景　南から
３号土坑セクション・全景東から

PL.4
１号溝全景　東から
１号溝セクション　南から
２号溝全景　北から
３号土坑セクション南から
３号溝全景　東から
３号溝セクション　東から
３号溝石流れ込み状況　東から
３号溝　板碑出土状況　南から

PL.5
４号溝全景　南から
４号溝セクション　南から
４号溝遺物出土状況
４号溝遺物出土状況
作業風景
包含層遺物出土状況　東から
包含層遺物出土状況　東から
包含層遺物出土状況アップ東から

PL.6
包含層遺物出土状況　北から
包含層遺物出土状況　アップ
包含層遺物出土状況　アップ
包含層遺物出土状況　アップ
包含層西壁セクション　東から
谷全景及び包含層西壁セクション
包含層西壁セクションアップ
埋め戻し状況　東から

PL.7　遺物写真

PL.8　遺物写真

Ⅰ　調査に至る経緯

平成 22 年 7 月、横山司甫氏（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に集合住宅建設予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、該当地周辺が縄文～中近世に至る散布地として遺跡台帳・地図に登録された埋蔵文化財包蔵地であるため、工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年 8 月 4 日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年 9 月 28 日に工事予定地の試掘調査を実施し、弥生時代の竪穴住居跡と推定される遺構を確認した。

試掘結果を受けて埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、建設予定の変更は不可能ということなので、文化財保護法第 93 条の規定による回答で建物建設予定地の記録保存の発掘調査が必要であると指示を出した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社高澤考古学研究所に委託して実施することとなり、平成 22 年 11 月 12 日付けで高崎市長・事業者・高澤考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定書に基づき平成 22 年 11 月 15 日付けで事業者と高澤考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。

Ⅱ　調査の方法と経過

高崎市教育委員会による試掘調査の結果、当該地には弥生時代の遺構があることが確認された。遺構確認面は現地表から約 40㎝下の黒褐色土上面である。試掘調査は平成 22 年 9 月 28 日に行われ、この時はかなりの湧水が認められた。これを受け、本調査は 24 時間排水可能な体制が整ってから開始された。重機を使用し遺構確認面までの土を除去し、人力にて遺構確認作業を行った。懸念されていた遺構確認面での湧水は無く、遺構確認作業の結果、竪穴状遺構 1 基、井戸 2 基、溝 4 条、土坑 3 基を検出した。

検出された遺構は、全て手作業にて掘り下げ作業を行い、埋没状況、平断面形を図化記録及び写真記録を所得しながら調査を行った。1 号溝掘り下げ中に湧水が認められた為、調査区南側及び西側に幅約 25㎝深さ約 20㎝の開渠を人力にて掘り下げ、常時水中ポンプにて排水を行いながら調査を進めた。1、2 号井戸は現地表から約 80㎝下にて湧水した為、水中ポンプを使用し排水作業を行いながら底面調査を行った。検出された各遺構の調査終了後、ラジコンヘリコプターを使用し空中撮影を行い、光波測量機を使用し平面測量を実施した。全ての測量が終了した後、調査区西側にて谷状地形が確認されていた為、サブトレンチ等を設定し精査した結果、層厚約 20 ～ 25㎝の遺物包含層を検出した。包含層は、谷状地形に伴い調査区西側に確認された為、人力にて包含層遺物を残しながら掘り下げ作業を行った。遺物は出土状況を写真撮影及び図化記録を所得し、必要に応じてエレベーションを行い、座標を与えて取り上げた。写真は 35㎜小型一眼レフカメラを用い、カラーリバーサル、モノクロームネガの 2 種類のフィルムを使用し、1010 万画素の小型一眼レフデジタルカメラを併用した。全ての遺構調査が終了した後、重機を使用し埋め戻しを行い、発掘調査を終了した。

11 月 15 日　安全対策、機材搬入、調査開始準備
11 月 17 日　重機による表土除去作業
11 月 18 日　遺構確認作業、1・3 号溝掘り下げ作業開始
11 月 24 日　2 号溝、1 号竪穴状遺構掘り下げ開始
11 月 26 日　1 号井戸掘り下げ開始
12 月 7 日　ラジコンヘリコプターにて空撮。光波測量機による平面測量
12 月 8 日　谷状地形により形成された遺物包含層の掘り下げ作業開始
12 月 15 日　現地調査終了
12 月 16 日　高崎市教育委員会による終了確認
12 月 17 日　重機による埋め戻し作業、仮設トイレ汲み取り、現場撤収作業

Ⅲ　遺跡の地理的環境と周辺遺跡

1．遺跡の地理的環境

関東平野の西北端に位置する高崎市は、西に現在も時より白煙の上がる浅間山、妙義山、北に広大な扇状地を持つ榛名山、赤城山、そして南西から南方にかけては御荷鉾山系、秩父山系等の山々が見渡すことができ、南東には広大な関東平野を望むことができる環境にある。山々から流れ出た水は、大小の河川となり北西から南東へと本市を貫流している。

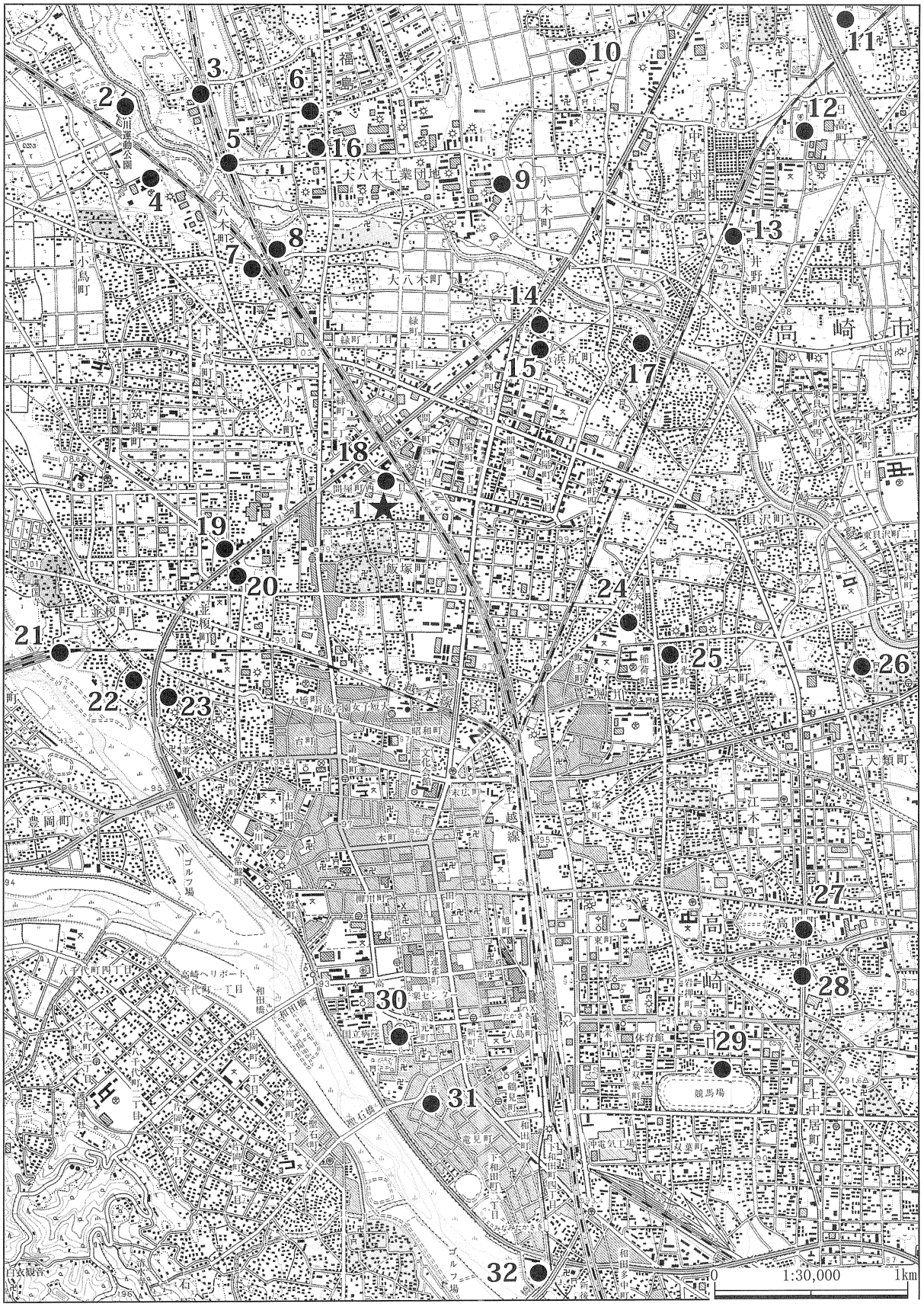
飯塚・貝沢堀添遺跡は、JR 北高崎駅の北約 900m にあり、南西 1.9km には榛名山西麓鼻曲山（標高 1654 m）を水源とする烏川が流れ、北東 1.5㎞には榛名山東南麓に形成された相馬ヶ原扇状地を水源とする井野川が流れている。本遺跡はこれら両河川に挟まれた場所に位置し、平坦で低湿な沖積地域中の微高地にあり、標高は 99 mである。

遺跡がある微高地は高崎台地と呼ばれる台地で、約 2.1 万年前の浅間山火山起源により発生した前橋泥流と呼ばれる堆積物が土台としてあり、その上層に約 1.1 万年前に堆積した高崎泥流が基盤となって形成されている。この高崎泥流の範囲は、本遺跡から北西約 2㎞の高崎市大八木町付近を北限とし、西は烏川、東は井野川を境とし、南端は井野川と烏川が合流する岩鼻町で、おおよそ、烏川と井野川に囲まれた地域である。泥流層下には、約 2 万年前に降下した As-BP（浅間板鼻褐色軽石群）、約 1.3 万年前に降下した As-YP（浅間板鼻黄色軽石）という浅間山の火山噴火を起源とした軽石の堆積が確認されている。

本遺跡では、現表土下約 80㎝にて高崎泥流層と考えられる黄褐色土が確認できる。泥流層は、調査区東側から中央付近では比較的平坦であるが、西側では南西方向に向かい緩やかに傾斜し、谷状地形が形成されている。最深部は現表土から 110㎝にて泥流層が認められ、東端と西端での高低差は 30㎝である。泥流層上は、漸移層を挟み As-C 軽石と考えられる白色軽石を含む黒色粘質土が約 20㎝堆積し、これより上層は、比較的水平な堆積をしている。この為、弥生時代以降は比較的安定した土地であったと推測される。遺跡地の現況は畑であるが、基盤層にて地形の起伏が確認される為、本遺跡は、小規模な谷を望む微高地にて営まれた集落であると考えられる。

高崎市庁舎からの遠景写真

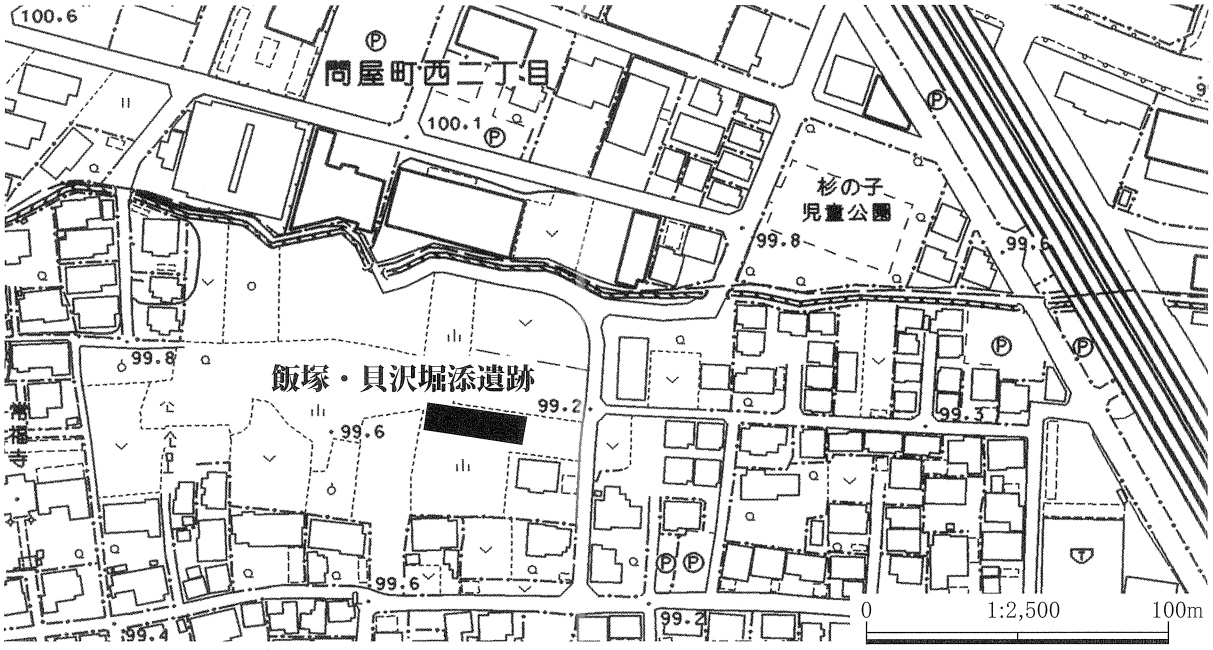
2．周辺遺跡



第１図　周辺遺跡図　1/30,000

第１表　周辺遺跡一覧表（主に弥生時代の遺跡）

No.	遺跡名	種別	文献名・刊行年
1	本遺跡	集落	飯塚・貝沢堀添遺跡　2011
2	御布呂遺跡	生産	御布呂遺跡　1980
3	熊野堂遺跡Ⅱ・Ⅲ	集落	熊野堂遺跡Ⅱ・Ⅲ　1984・1990
4	芦田貝戸遺跡	生産	芦田貝戸遺跡Ⅱ　1980
5	熊野堂遺跡Ⅱ	生産	熊野堂遺跡Ⅱ
6	雨壷遺跡	集落	熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壷遺跡　1984
7	大八木屋敷遺跡	生産	大八木屋敷遺跡
8	融通寺遺跡	集落	融通寺遺跡　1991
9	小八木Ⅰ遺跡	集落・生産	小八木Ⅰ遺跡　1979
10	正観寺遺跡群Ⅰ	集落	正観寺遺跡群（1）1979
11	日高遺跡	集落・生産	日高遺跡（Ⅰ）1979　日高遺跡　1982
12	中尾村前遺跡	生産	中尾村前遺跡
13	井野清水	包含層	高崎市内緊急埋蔵文化財発掘調査報告書　1992
14	浜尻Ａ地点遺跡	集落	群馬県史　資料編２　1986
15	浜尻遺跡	集落	浜尻遺跡　1981
16	大八木・伊勢廻遺跡２	集落	大八木・伊勢廻遺跡２　2010
17	浜尻旭貝戸遺跡	集落	浜尻旭貝戸遺跡　2002
18	大八木富士廻り遺跡	集落	高崎市内緊急埋蔵文化財発掘調査報告書　1987
19	並榎北遺跡	生産	並榎北遺跡
20	並榎北Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡	生産	並榎北Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡　1996
21	上並榎南遺跡	集落	上並榎南遺跡　1985
22	上並榎屋敷前遺跡	集落	上並榎屋敷前遺跡　1992
23	巾遺跡	集落	群馬県遺跡調査報告書　群馬県の遺跡　1963
24	稲荷町Ⅰ遺跡	集落	稲荷町Ⅰ遺跡　1992
25	林製作所遺跡	集落か	群馬県史　資料編２　1986
26	上大類北宅地遺跡	集落	上大類北宅地遺跡　1983
27	高関堰村遺跡	集落	高関堰村遺跡　1992
28	高関村前遺跡	集落	高関村前遺跡　1993
29	高崎競馬場遺跡	集落	群馬県遺跡調査報告書　群馬県の遺跡　1963
30	高崎城遺跡	集落	高崎城遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ　1990
31	竜見町遺跡	包蔵地	群馬県史　資料編２　1986
31	群馬県高崎市城南小学校庭弥生遺跡	集落	群馬県高崎市城南小学校庭弥生遺跡　1973

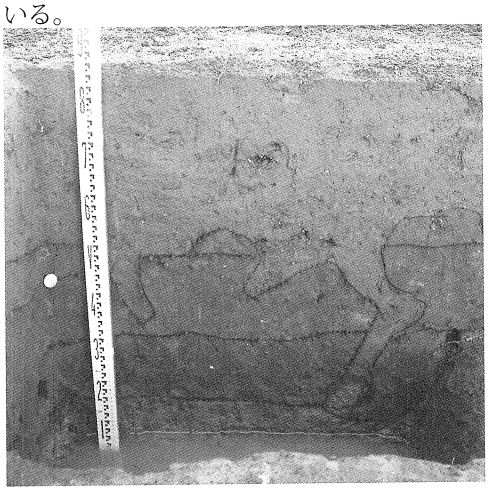


第２図　遺跡位置図　1/2,500

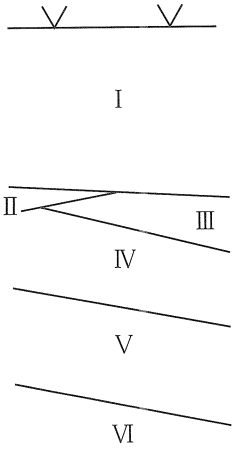
Ⅳ　基本堆積土層

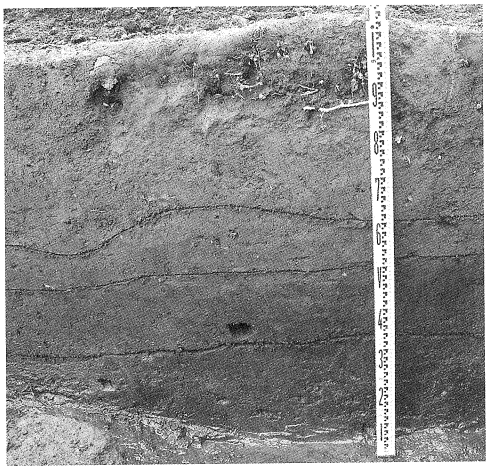
調査区は東西 30 m、南北 6 mで東西に長く、西端と東端では表土下の堆積が若干異なる為、2 箇所にて基本堆積土層の確認をした。また、補足として、1 号井戸の壁を使いⅤ層下の泥流層の状況を確認した。（第 3 図）

Ⅰ層は表土で、平均して 40㎝堆積している。現況が畑の為、粘性及び締まりは弱く、白色軽石を含む黒褐色土である。Ⅱ層はややシルト質の灰褐色土で、調査区中央及び部分的に堆積が認められる。Ⅲ層は白色軽石をやや多く含む黒色土で、粘性及び締まりが若干認められる。この層下が遺構確認面である。Ⅳ層は白色軽石を含む黒色土で、弥生土器を包含している。特に調査区西側では谷状地形に伴い層厚が厚くなり、遺物を多く含む遺物包含層が形成されている。Ⅴ層は白色軽石を少量含む黒色土で、遺物の包含は認められない。Ⅵ層は粘性のある褐色土で、Ⅶ層からⅤ層への漸移層である。Ⅶ層は黄褐色土で粘性及び締まりがあり、大小の礫を含む泥流層である。Ⅷ層は青灰色粘質土で水平堆積は認められず、うねるように堆積している。（第 3 図 1 号井戸断面図参照）また、Ⅶ層同様大小の礫を含む。Ⅰ層からⅢ層は比較的に水平堆積をしているが、Ⅳ及びⅤ層では調査区西側に発達する谷状地形に伴い調査区中央付近から西南西に向かい緩やかに傾斜し層厚が増している。



調査区東端　基本堆積Ａ





調査区西端　基本堆積Ｂ

1 号井戸壁断面

Ⅰ層　黒褐色土 Hue10YR3/1　粘性弱・しまり弱　白色軽石（As-A 及び As-B か）を少量含み炭化物粒を若干含む

Ⅱ層　褐灰色土 Hue10YR4/1　粘性弱・しまりあり　白色軽石、黄色軽石をやや多く含む　シルト質土

Ⅲ層　黒褐色土 Hue10YR2/2　粘性やや有り・しまりややあり　白色軽石（As-C か）を多く含む

Ⅳ層　黒褐色土 Hue10YR3/1　粘性あり・しまりややあり　白色軽石（As-C か）をやや多く含み、調査区西側にて弥生土器を包含する

Ⅴ層　黒褐色土 Hue10YR2/3　粘性あり・しまりややあり　白色軽石（As-C か）を少量含む

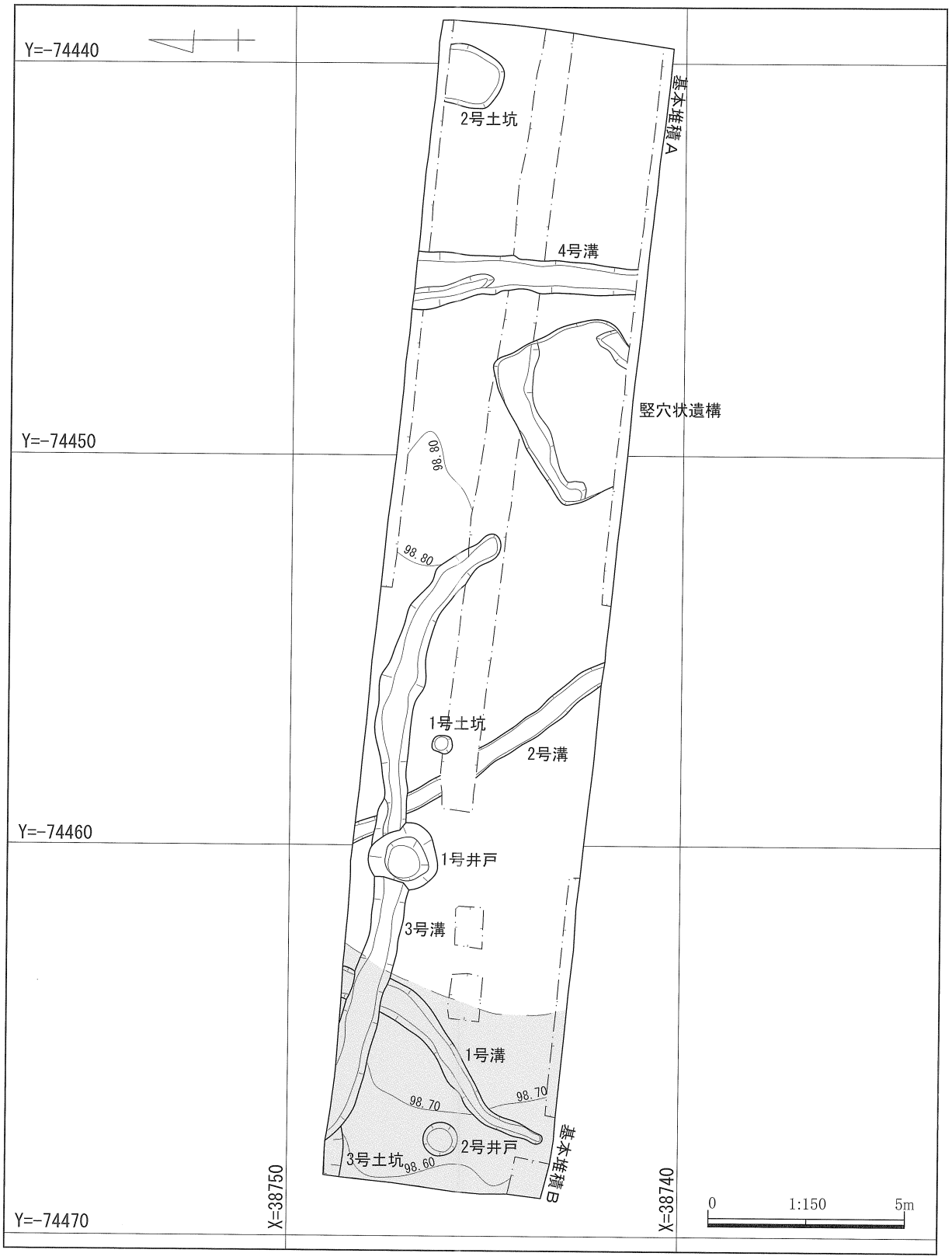
Ⅵ層　暗褐色土 Hue10YR3/4　粘性あり・しまりあり　黄色軽石、白色軽石を含む

Ⅶ層　黄褐色土 Hue10YR5/6　粘性あり・しまりあり　5 から 30㎝大の礫を含む粘質土

Ⅷ層　暗青灰色土 5BG3/1　粘性あり・しまりあり　5 から 30㎝大の礫を含み、部分的に砂質な箇所がある粘質土

第 3 図　基本堆積柱状図　写真

Ⅴ　調査の成果

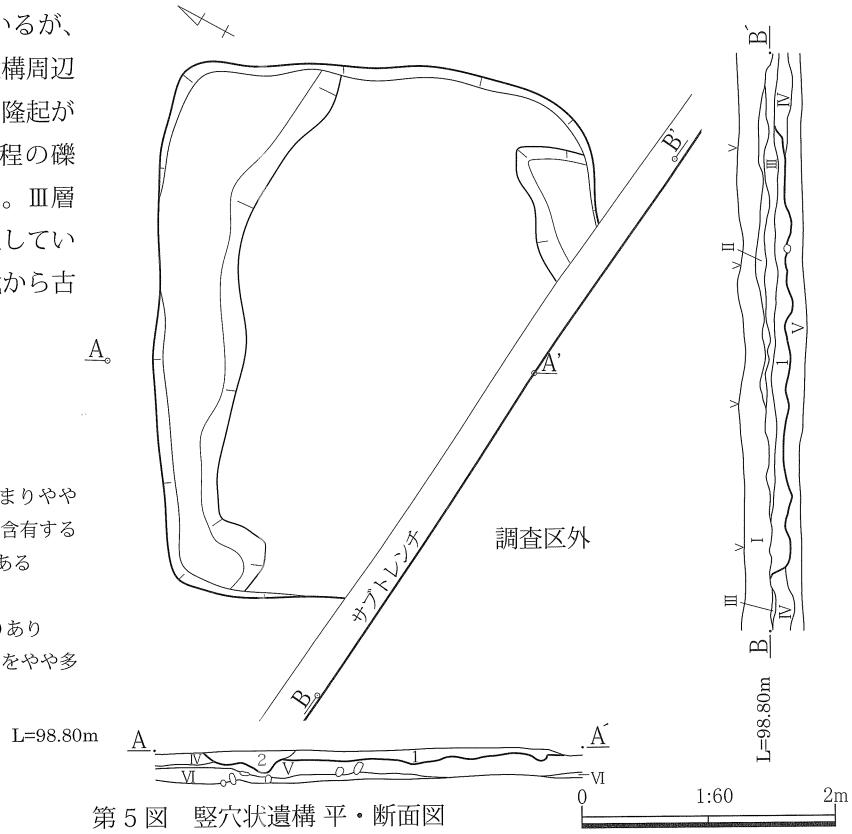


第４図　遺跡全体図　1：150　スクリーントーンは谷状地形部

竪穴状遺構

調査区南東にて検出された。規模は、長軸 4.3m、短軸 3.5m で、形状は隅丸方形である。竪穴住居であると考え調査を進めたが、住居に伴う付帯施設等は確認されず、掘り込みも不整形である為、竪穴状遺構とした。

中央部分が比較的高く、北側及び南側が一段深く掘り込まれ、竪穴住居の掘り方に似た形態である。遺物は、弥生土器の細片が少量出土しているが、図化できるものは無かった。本遺構周辺では、風倒木と推測される地山の隆起が認められ、その為 20 ～ 30㎝大程の礫が遺構内及び周辺に散乱していた。Ⅲ層下での検出で、弥生土器片が出土していることから、帰属時期は弥生時代から古代の間であると推測される。



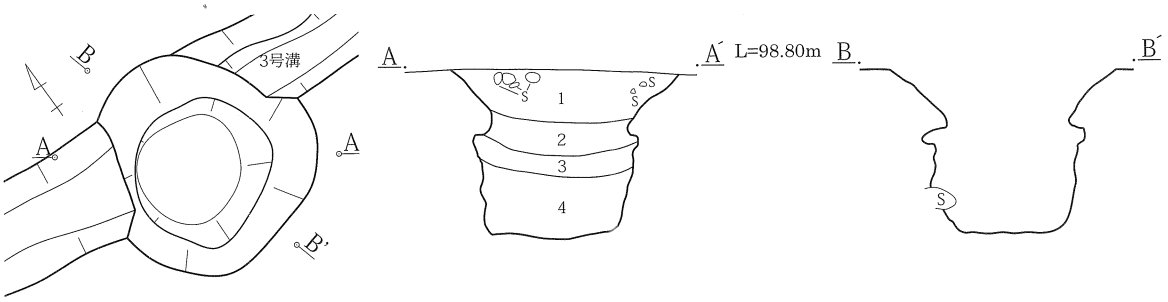
1. 黒褐色土 Hue10YR 3/2　粘性あり・しまりややあり。白色軽石をやや多く含み、遺物を含有する植物の根痕により部分的に鉄分の沈着がある

2. 黒褐色土 Hue10YR 2/2　粘性弱・しまりあり　白色軽石を少量含み、Ⅳ層の小ブロックをやや多く含む

第 5 図　竪穴状遺構 平・断面図

1 号井戸

調査区中央北側にて検出された。3 号溝と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。平面形は不整円形で、深さは 1.4m である。確認面から約 30㎝下にて湧水を確認した。この付近の壁は全体的に水の影響で崩れ、オーバーハングしている。底面は平坦で、付帯施設等は確認されなかった。下層にて 20㎝の川原石及び角閃石安山岩が検出された。それぞれ焼けた痕跡は認められなかった。遺物は検出されなかったが、覆土にて As-B 軽石と考えられる軽石が認められる為、中世の遺構であると考えられる。

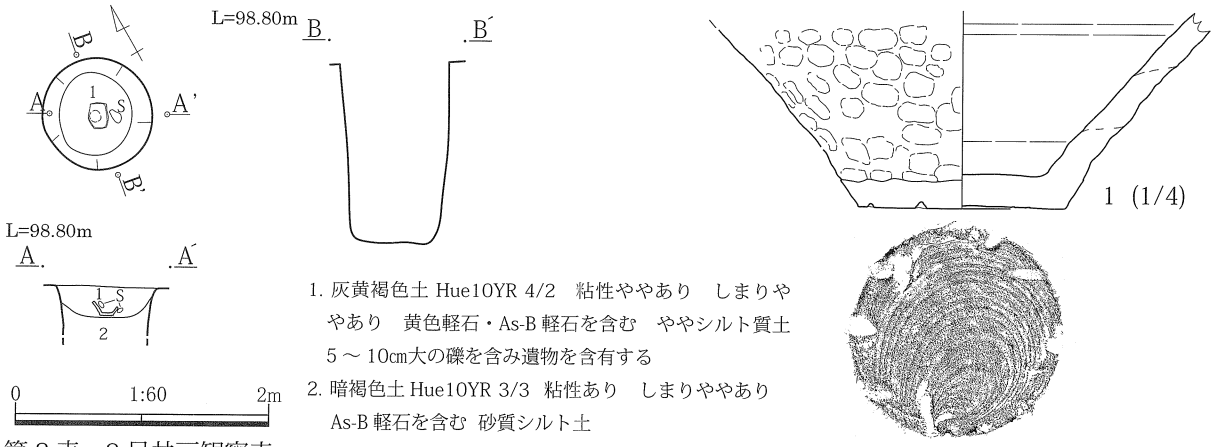


1. 灰黄褐色土 Hue10YR 4/2 粘性弱・しまりややあり　As-B 軽石を少量含み 3 ～ 10㎝の礫を含む
2. 褐灰色土 Hue10YR 4/1 粘性あり・しまり弱　As-B 軽石をやや多く含む
3. オリーブ褐色土 Hue2.5Y 4/3 粘性あり・しまり弱　As-B 軽石をやや多く含む粘質土
4. オリーブ黒土 Hue5Y 粘性強・しまり弱　As-B 軽石をやや多く含む粘質土

第 6 図　1 号井戸 平・断面図

2号井戸

調査区西端にて検出された。平面は径 90cmの円形で、断面は筒状である。深さ 1.5m で、底面には付帯施設は認められず、平坦である。確認面から 10cm下にて湧水を確認した。1 号井戸のような湧水点での壁の崩落は認められなかった。覆土は全体的にシルト質土で、As-B 軽石を含む。遺物は覆土上位にて鉢（1）が正位で出土した。出土した遺物の特徴から帰属時期は 15 世紀前半であると推測される。



1. 灰黄褐色土 Hue10YR 4/2　粘性ややあり　しまりややあり　黄色軽石・As-B 軽石を含む　ややシルト質土　5～10cm大の礫を含み遺物を含有する
2. 暗褐色土 Hue10YR 3/3　粘性あり　しまりややあり　As-B 軽石を含む　砂質シルト土

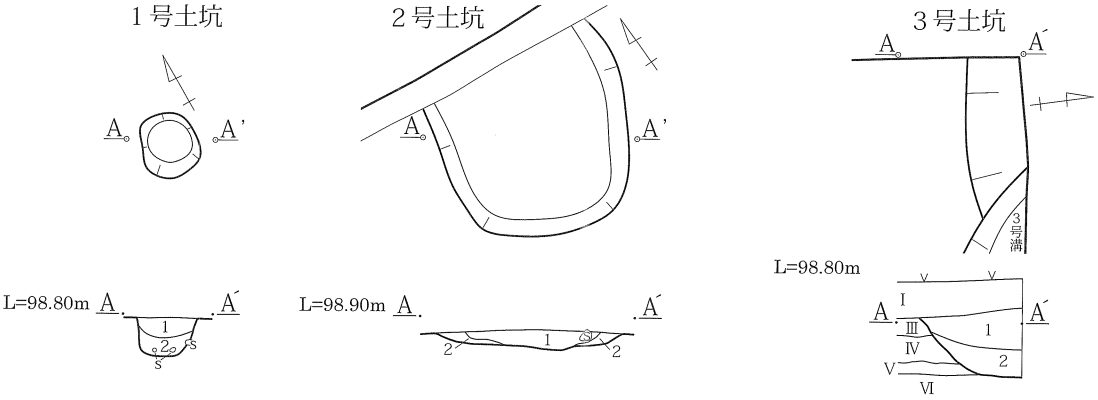
第２表　２号井戸観察表

番号	種別 器種	口径cm・底径cm 器高〈残存高〉cm	成形・調整・文様等	胎土 色調・焼成	備　考
1	軟質陶器 鉢	—　　11 〈10.2〉	外面：轆轤成形後、指押さえ調整　内面：轆轤成形後下部のみユビナデ　底部回転糸切左回転	細砂粒 灰色・良	器面に指頭圧痕が明瞭に残る

第７図　２号井戸 平・断面　遺物図

土坑

計３基の土坑が検出された。２号土坑は弥生土器片が極少量出土し、覆土には As-B 軽石が含まれていない。また、Ⅲ層下での確認である為、帰属時期は弥生時代から古代の間であると推測される。1、３号土坑は覆土に As-B 軽石が含まれる為、帰属時期はそれぞれ中世であると考えられる。３号土坑については、そのほとんどが調査区外になる為、詳細は不明であるが、井戸になる可能性が推測される。また、３号溝と重複関係にあり、本遺構の方が古い。



1. にぶい黄褐色土 Hue10YR 4/3　粘性弱　しまりややあり　As-B 軽石をやや多く含む
2. 暗褐色土 Hue10YR 3/3　粘性ややあり　しまり弱　As-B 軽石を多く含み、やや砂質土　3～5cm 大の礫を含む

1. 黒褐色土 Hue10YR 3/2　粘性弱　しまりややあり　白色軽石を少量含み、弥生土器片を含有する
2. 黒褐色土 Hue10YR 2/2　粘性ややあり　しまり弱　白色軽石を少量含み、地山黒色土小ブロックを若干含む

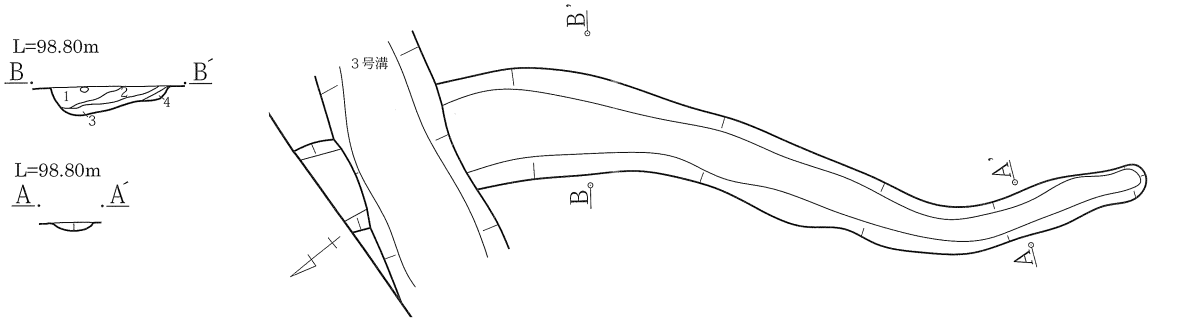
1. 黒褐色土 Hue10YR 3/2　粘性ややあり　しまりややあり As-B 軽石をやや多く含み、白色軽石を少量含む
2. 黒褐色土 Hue10YR 2/2　粘性ややあり　しまりややあり　As-B 軽石を多く含み、白色軽石を少量含む　やや砂質土

第８図　１～３号土坑 平・断面図

0　1:60　2m

1号溝

3号溝と重複関係にあり、本遺構の方が古い。最大幅は90㎝で、南から北に向かい傾斜している。最下層は砂質層である為、流水があったと考えられる。南端は途絶えているが、調査区壁断面にて確認される為、南へ伸びていると想定される。遺物は弥生土器の細片が少量出土しているが図化できるものは無く、流れ込みであると考えられる。覆土にAs-B軽石が認められ、Ⅰ層下で確認される為、おおむね中世の遺構であると推測される。

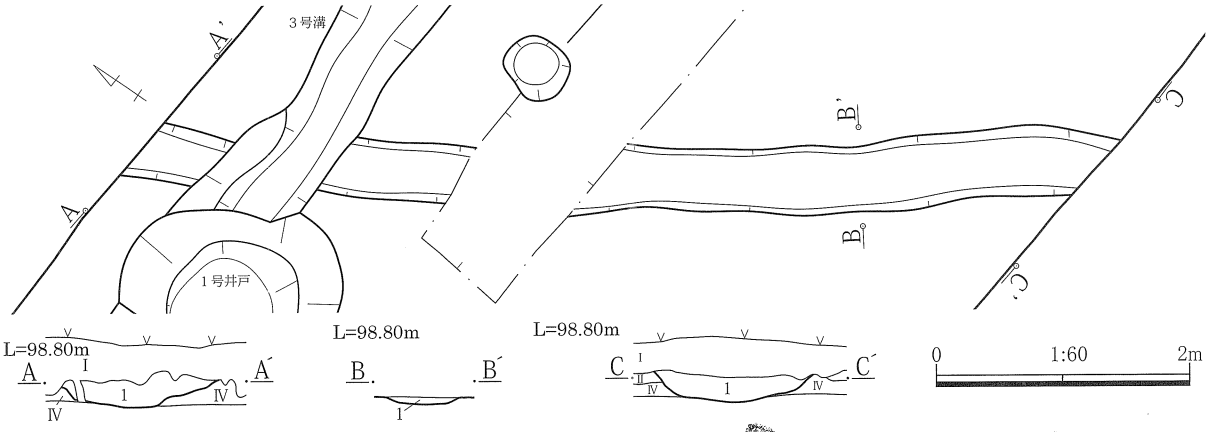


1. にぶい黄褐色土 Hue10YR4/3 粘性ややあり・しまり弱　As-B軽石・白色軽石を少量含み、砂質シルト土
2. 灰黄褐色土 Hue10YR4/2 粘性あり・しまりややあり　As-B軽石・白色軽石を少量含む
3. 褐灰色土 Hue10YR4/1 粘性あり・しまりややあり　2層と地山黒色土の混土
4. 黒褐色土 Hure10YR2/3 粘性弱・しまりあり　地山黒色土小ブロックを多く含む

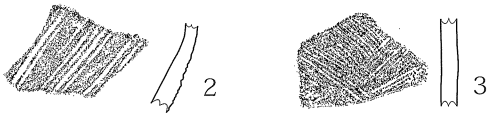
第9図　1号溝　平・断面図

2号溝

3号溝と重複関係にあり、本遺構の方が古い。幅は60㎝、深度20㎝で、調査区を南北に横断する。北壁及び南壁にて断面確認をしたが、傾斜はほとんど無く、覆土には流水に伴う砂質層は確認されなかった。遺物は弥生土器の細片が少量出土しているが流れ込みであると考えられる。覆土にAs-B軽石が含まれ、Ⅰ層下で確認される為、中世の遺構であると推測される。



1. 黒褐色土 Hue10YR 3/2　粘性弱・しまりややあり　白色・黄色軽石を少量含み、As-B軽石を含む　ややシルト質土



第3表　2号溝　遺物観察表

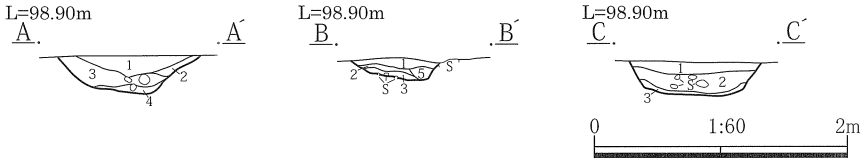
番号	種別 器種	口径㎝・底径㎝ 器高〈残存高〉㎝	成形・調整・文様等	胎土 色調・焼成	備考
2	弥生土器 甕	—　— 〈3.5〉	外面：5歯の櫛描き（羽状文か）　内面：ハケナデ後ヨコ方向のミガキ	細砂粒・細礫 にぶい橙・やや軟質	
3	弥生土器 甕	—　— 〈3.4〉	外面：羽状文（ハケ状工具か）　内面：ヨコ方向のハケナデ	細砂粒・黒色粒 にぶい黄橙・良	

第10図　1号溝　平・断面・遺物図

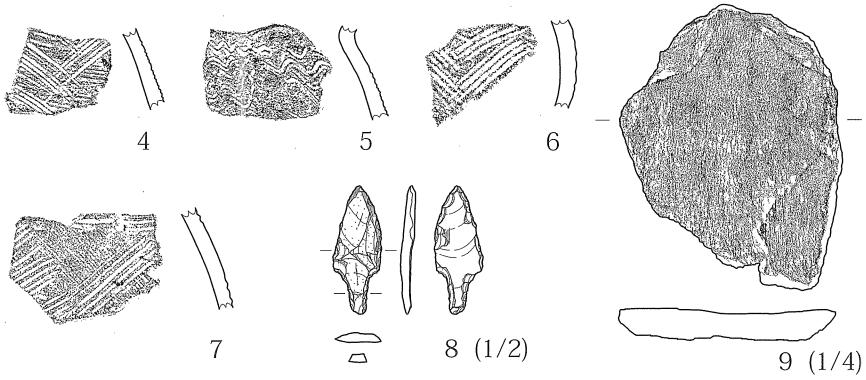
3号溝

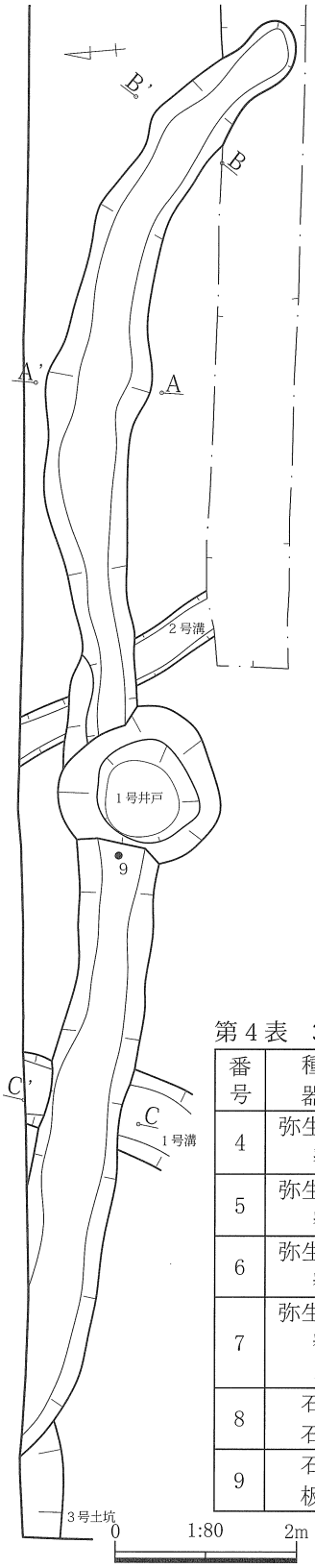
1、2号溝及び1号井戸、3号土坑と重複関係にある。1、2溝、3号土坑より新しく、1号井戸より古い。最大幅75㎝、深度35㎝である。東側で途絶えてしまっている為、調査区の各壁にて本溝の痕跡を確認したが検出されなかった。東から西向かい緩やかに傾斜している。

覆土は全体的に円礫を多く含み（ＰＬ４)、As-B軽石の含有が認められる。また、最下層にてやや砂質層が堆積している為、流水があったと考えられる。遺物は片岩製の板碑片が1点、石鏃1点、弥生土器片が少量出土している。本遺構はⅠ層下で確認され、覆土にAs-B軽石が含まれることから、帰属時期は中世であると考えられる。



1. 暗褐色土 Hue10YR 3/3　粘性弱　しまりややあり　白色・黄色軽石を少量含み、As-B軽石を含むややシルト質土
2. 黒褐色土 Hue10YR 3/1　粘性弱　しまりややあり　白色軽石を少量含み、地山黒色土小ブロックを若干含む
3. 黒褐色土 Hue10YR 3/2　粘性弱　しまりややあり　白色軽石を含み、3～20㎝大の礫を多く含む
4. にぶい黄褐色土 Hue10YR 5/4　粘性ややあり　しまりややあり　白色・黄色軽石を含み、地山黄褐色土の小ブロックを多く含む　やや砂質土
5. 黒褐色土 Hue10YR 3/1　粘性強　しまりややあり　白・黄色軽石を少量含む　やや砂質土





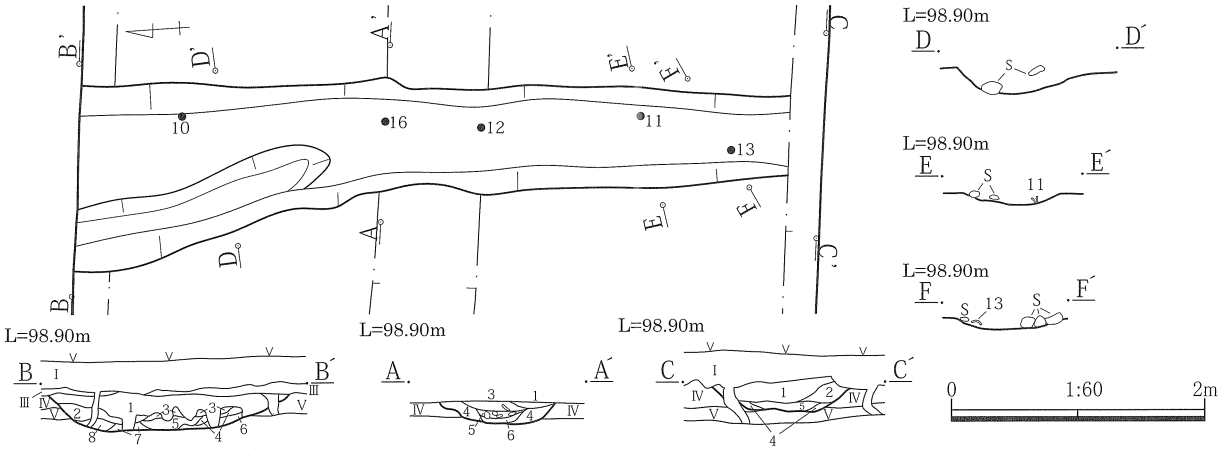
第4表　3号溝　遺物観察表

番号	種別 器種	口径㎝・底径㎝ 器高〈残存高〉㎝	成形・調整・文様等	胎土 色調・焼成	備　考
4	弥生土器 甕	—　— 〈3.2〉	外面：櫛描き羽状文　内面：ヨコ方向のハケナデ	細砂粒 暗灰色・良	
5	弥生土器 甕	—　— 〈4.1〉	外面：櫛描き波状文　内面：ヨコ方向のミガキ	細砂粒・白色粒 にぶい赤褐色・良	
6	弥生土器 甕	—　— 〈3.5〉	外面：櫛描き羽状文　内面：斜め方向のミガキ	細砂粒・白色粒 灰黄褐色・やや軟	
7	弥生土器 甕	—　— 〈4〉	外面：ハケナデ後櫛描き羽状文頸部簾状文　内面：斜め方向のミガキ	細砂粒・雲母 灰黄褐色・良	
8	石器 石鏃	重さ：0.64 g	長：3.4 cm 幅：1.3 cm 厚：2.5 mm	石材：黒色頁岩	
9	石器 板碑	重さ：393 g	長：14.7 cm 幅：11.4 cm 厚 1.5 cm	石材：緑色片岩	

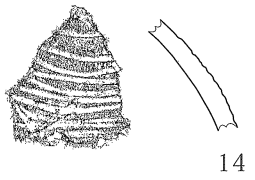
第11図　3号溝　平・断面・遺物図

4号溝

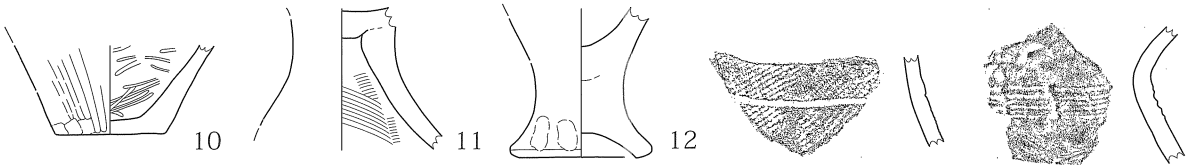
最大幅 145㎝、深さ 25㎝を計る。南から北にゆるやかに傾斜している。覆土の堆積状況から自然埋没であると考えられる。中～下層にて砂質層が認められる為、流水があったと推測される。覆土には、1～3号溝で見られた As-B 軽石は含まれず、Ⅲ層中に含まれる As-C 軽石と推測される白色軽石が含まれる。遺物は、弥生土器片が主体で溝全面から出土している。特に砂質層の5及び8層中からの出土が顕著である。これらは若干の摩滅が見られるが、破損面は比較的鋭利な為、近距離からの混入であると推測される。遺物の出土状況及びそれらの特徴から、帰属時期は弥生時代中期後半であると考えられる。



1. 黒褐色土 Hue10YR 3/2　粘性弱　しまりややあり　白色軽石を少量含む　ややシルト質土
2. 黒褐色土 Hue10YR 2/2　粘性弱　しまりややあり　白色軽石を少量含み、黄色軽石を極少量含む
3. 黒色土 Hue10YR 2/1　粘性ややあり　しまりややあり　白色軽石を少量含む
4. 黒褐色土 Hue10YR 3/2　粘性弱　しまりややあり　白色・黄色軽石を少量含む　砂質シルト質土
5. 黒褐色土 Hue10YR 3/1　粘性なし　しまり弱　白色軽石をやや多く含み、黄色軽石を少量含む
砂質土で一部ラミナ状堆積が認められる　遺物を多く含み、5～20㎝大の礫を含む
6. 黒褐色土 Hue10YR 3/2　粘性弱　しまりややあり　白色軽石を少量含み、黒色土小ブロックを含む
7. 黒褐色土 Hue10YR 2/2　粘性ややあり　しまりややあり　黒色土小ブロックを少量含む　やや砂質土
8. 暗褐色土 Hue10YR 2/3　粘性弱　しまり弱　白色軽石を含み、砂質土で5層同様遺物を多く含む


14

15


10 11 12 13 16

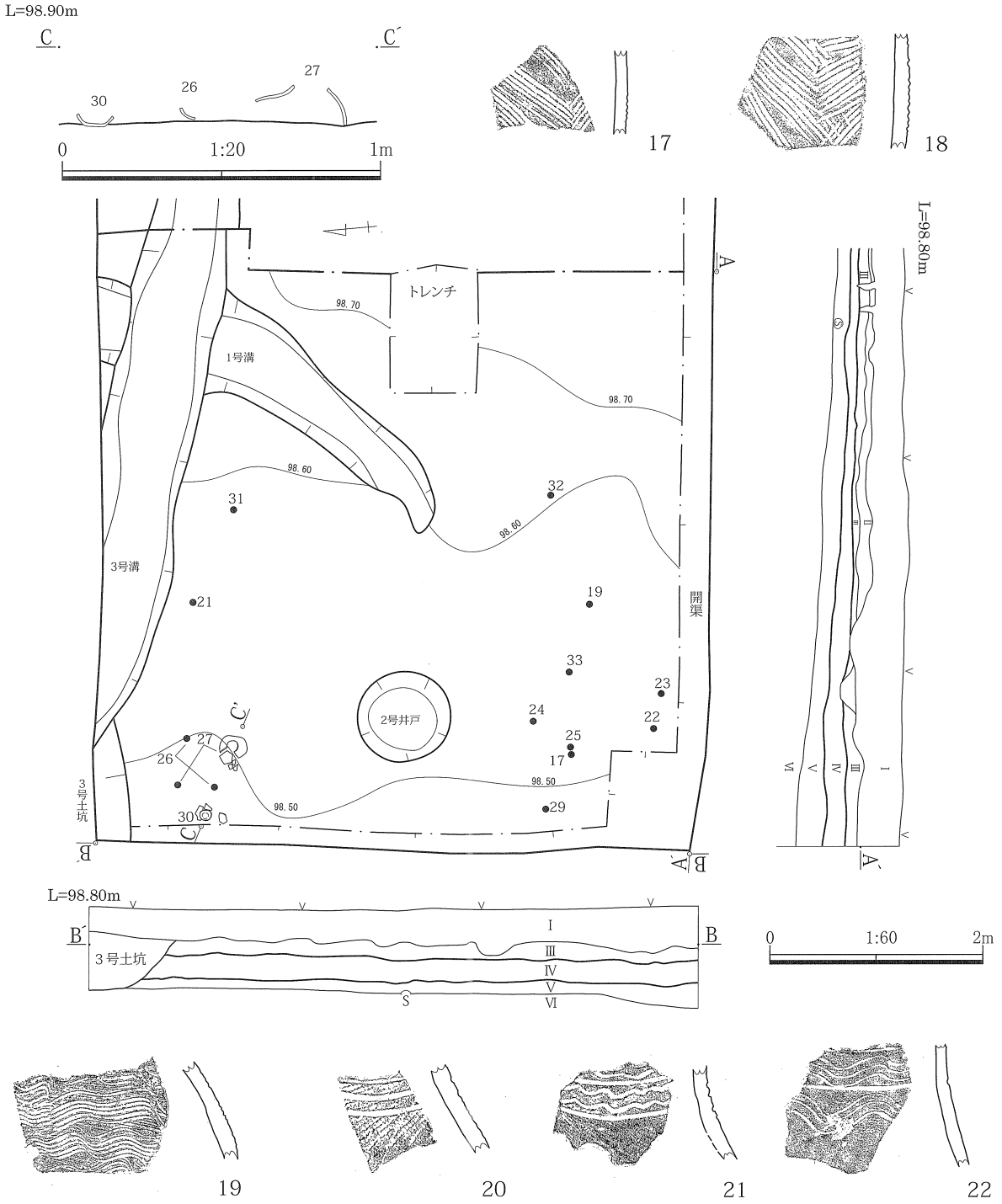
第5表　4号溝遺物観察表

番号	種別 器種	口径㎝・底径㎝ 器高〈残存高〉㎝	成形・調整・文様等	胎土 色調・焼成	備　考
10	弥生土器 甕	—　4.4 〈3.4〉	外面：縦方向のミガキ　内面：横及び斜め方向のミガキ	極細砂粒・白色粒 外：灰褐色　内：黒色・良	
11	弥生土器 高坏	—　— 〈5.5〉	外面：坏内部及び脚部全体に赤彩　内面：斜め方向のハケナデ	細砂粒・雲母 外：赤色　内：にぶい褐色・良	外面赤彩
12	弥生土器 台付甕	—　5.6 〈5.8〉	外面：底部端横方向のヘラ削り　台部内面：ナデ　体部内面：ナデ	砂粒・白色粒 にぶい黄褐色・良	蓋の可能性も考えられる
13	弥生土器 壷	—　— 〈3.5〉	外面：縄文を地文とし2条の平行沈線文　内面：ナデ	細砂粒・黒色粒 灰白色・良	
14	弥生土器 壷か	—　— 〈5.2〉	外面：連弧文か　内面：ナデ	細砂粒・雲母 暗褐色・良	球胴
15	弥生土器 甕	—　— 〈3.6〉	外面：ハケナデ後コの字重ね文　内面：斜め方向のハケナデ後部分的に横方向のミガキ	細砂粒・白色粒 暗褐色・良	
16	弥生土器 甕	—　— 〈5.3〉	外面：頸部4歯の簾状文　櫛描き羽状文と考えられる模様わすかにあり　内面：ナデ	細砂粒・白色粒 暗赤褐色・良	

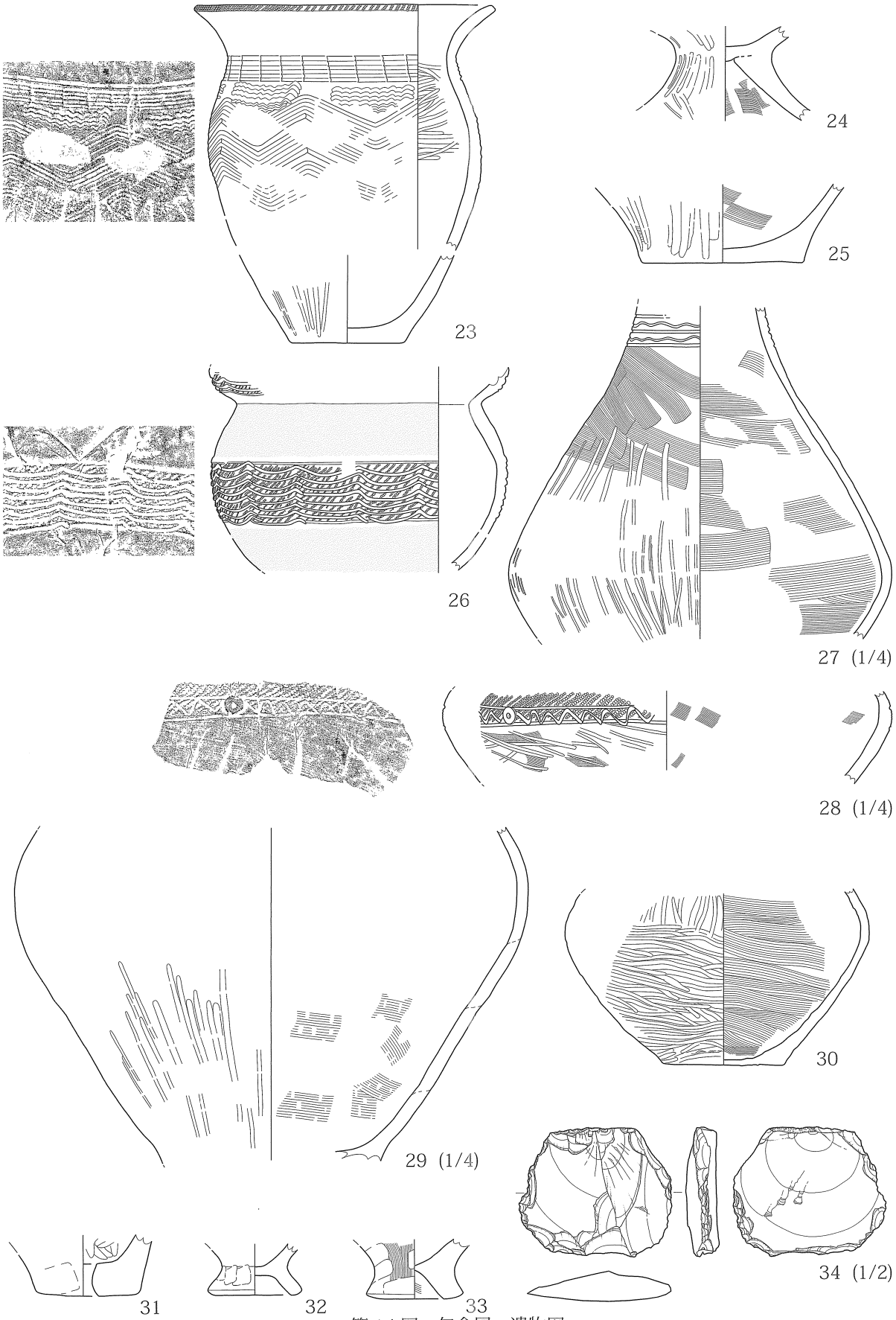
第12図　4号溝　平・断面・遺物図

包含層

調査区の約６分の１が谷状地形となり、弥生土器を包含する遺物包含層が形成されている。谷頭は不明瞭ではあるが、おおむね１号溝と３号溝が交差する地点から調査区西側全てで、調査区外に発達していると推測される。谷は東北東から西南西方向に向かい広がり、調査区内での高低差は 15㎝を計る。包含層の覆土は、基本堆積土層のⅣ層が主体で、谷最深部では層厚約 25㎝である。遺物は、ほとんど摩滅しておらず、散乱する状況で検出された。また、近距離での接合関係にある為、包含層中の遺物はごく近距離からの提供であると推測される。



第 13 図　包含層　平・断面　遺物図



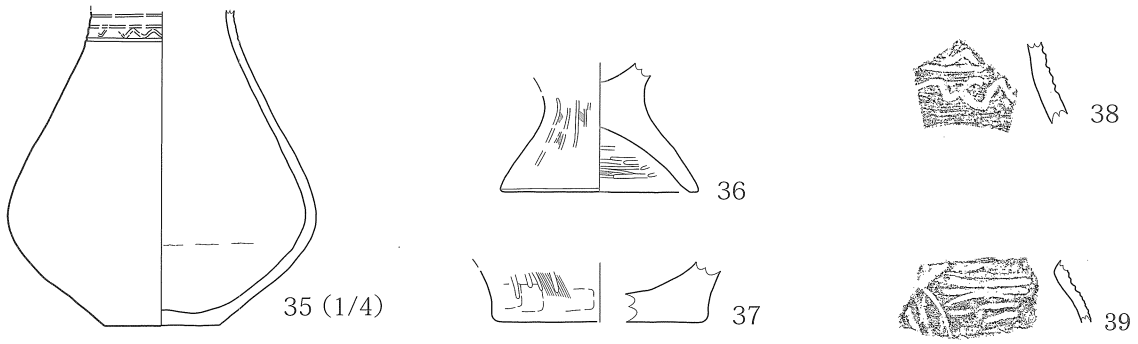
第 14 図　包含層　遺物図

第６表　包含層遺物　遺物観察表

番号	種別 器種	口径cm・底径cm 器高〈残存高〉cm	成形・調整・文様等	胎土 色調・焼成	備　考
17	弥生土器 甕	—　— 〈3.9〉	外面：6 歯の櫛描き羽状文　内面：横方向のミガキ	極細砂粒・雲母 褐灰色・良	
18	弥生土器 甕	—　— 〈5.3〉	外面：4 歯の櫛描き羽状文　内面：横方向のミガキ	細砂粒 にぶい褐色・良	
19	弥生土器 甕	—　— 〈4.6〉	外面：横方向のハケナデ後 6 歯の櫛描き波状文　内面：横方向のハケナデ	細砂粒・白色粒 褐灰色・良	
20	弥生土器 壷	—　— 〈4.1〉	外面：縄文地文とし平行沈線文　内面：ナデ	極細砂粒 灰白色・良	
21	弥生土器 壷	—　— 〈4.4〉	外面：斜め方向のハケナデ後平行沈線文沈線間に 2 条の連続山形文　内面：ナデ	細砂粒・白色粒 灰色・良	
22	弥生土器 壷	—　— 〈5.7〉	外面：平行沈線文の間に 3 歯の櫛描き波状文　内面：ナデ	細砂粒・白色粒 外：褐灰色　内：暗褐色・良	
23	弥生土器 甕	16　— 〈13〉	外面：口唇部縄文　頸部 6 歯の単節簾状文　同工具により 3 段の羽状文　簾状文と羽状文の間に同工具による波状文下部縦方向のミガキ　内面：横方向のミガキ	細砂粒・白色粒 にぶい褐色・良	櫛描き文は全て同一工具による施文と考えられる
24	弥生土器 高坏	—　— 〈5.1〉	外面：脚部縦方向のミガキ・赤彩　内面：坏部赤彩　脚部横方向のハケナデ	細砂粒・雲母 外：赤　内：坏部赤・脚部褐色	赤彩
25	弥生土器 甕	—　8.6 〈4.1〉	外面：ハケナデ後縦方向のミガキ　内面：ハケナデ後横方向のミガキ	細砂粒・白色粒・雲母 暗灰色・良	
26	弥生土器 鉢	—　— 〈11〉	外面：口縁部縄文地文と連続重弧文　最大径部縄文を地文とし沈線にて区画後連続重弧文　施文帯以外は赤彩　内面：横方向のハケナデ	極細砂粒 にぶい黄橙・良	赤彩
27	弥生土器 壷	—　— 〈23.5〉	外面：頸部平行沈線の間に連続山形文　体部ハケナデ後縦方向のミガキ（最大径部より下が密）内面：横方向のハケナデ	細砂粒・黒色粒 外：灰黄褐色　内：暗灰色・良	
28	弥生土器 壷	—　— 〈5.7〉	外面：最大径部縄文を地文とし平行沈線間に連続山形文　山形文部に円形付文あり　最大径下はハケナデ後斜め方向のミガキ　内面：斜め方向のハケナデ	細砂粒 外：にぶい黄褐色　内：灰色・良	
29	弥生土器 壷	—　— 〈23.7〉	外面：最大径下は縦方向のミガキ　内面：横方向のハケナデ	細砂粒・白色粒 にぶい黄褐色・良	
30	弥生土器 壷	—　6.6 〈9.3〉	外面：最大径より上は縦方向、下は横方向のミガキ　内面：横方向のハケナデ	細砂粒・黒色粒 灰黄褐色・良	
31	弥生土器 甑	5.5　— 〈3.3〉	外面：下端横方向の削り　内面：縦・横方向のミガキ	細砂粒・白色粒・雲母 外：にぶい黄褐色　内：暗灰色	
32	弥生土器 台付甕	—　5 〈2.7〉	外面：台取り付け部横方向のヘラ削り　内面：ナデ	細砂粒・白色粒 外：灰黄褐色　内：暗灰色・良	
33	弥生土器 台付甕	—　5.2 〈3.2〉	外面：ハケナデ後横方向のケズリ　内面：体部ナデ　台部ハケナデ	細砂粒 褐灰色・良	
34	石器 スクレーパー	重さ：33.4 g	長：4.4 cm　幅：5.3 cm　厚：0.8 mm	石材：黒色頁岩	

遺構外遺物

遺構確認時において、調査区のほぼ全域から遺構には伴わない土器片が出土している。35、36、37 は高崎市教育委員会による試掘調査時に出土した遺物である。位置は調査区中央付近、層位はⅣ層中である。遺構には伴なっていないが、この周辺には風倒木と考えられる地山の隆起及び陥没がみられる為、これらに伴い混入した可能性が考えられる。38 と 39 は遺構確認時Ⅳ層上面で出土したものである。破損面は鋭利で、さほど摩滅はしていない。他に少量の弥生土器破片が出土しており、いずれにおいても破損面は比較的鋭利である。



第 15 図　遺構外遺物　遺物図

第 7 表　遺構外遺物　遺物観察表

番号	種別 器種	口径cm・底径cm 器高〈残存高〉cm	成形・調整・文様等	胎土 色調・焼成	備　考
35	弥生土器 壷	—　　6.2 〈16.4〉	外面：摩滅が著しが頸部平行沈線文の間に連続山形文　体部下ミガキ　内面：ナデ	細砂粒・黒色粒 にぶい黄橙色・良	
36	弥生土器 台付甕	—　　7.8 〈5.2〉	外面：ハケナデ後縦方向のミガキ　内面：横方向のハケナデ後横方向のミガキ	細砂粒・黒色粒 にぶい黄橙色・良	
37	弥生土器 甕	—　　8.6 〈2.3〉	外面：ハケナデ後縦方向のミガキ　底部端ヘラ削り　内面：ナデ	細砂粒 にぶい黄橙色・良	
38	弥生土器 壷	—　　— 〈3.1〉	外面：平行沈線の間に山形文　内面：ナデ	細砂粒 褐色・良	
39	弥生土器 壷	—　　— 〈2.4〉	外面：弧文か　内面：横方向のミガキ	極細砂粒 にぶい黄橙色・良	

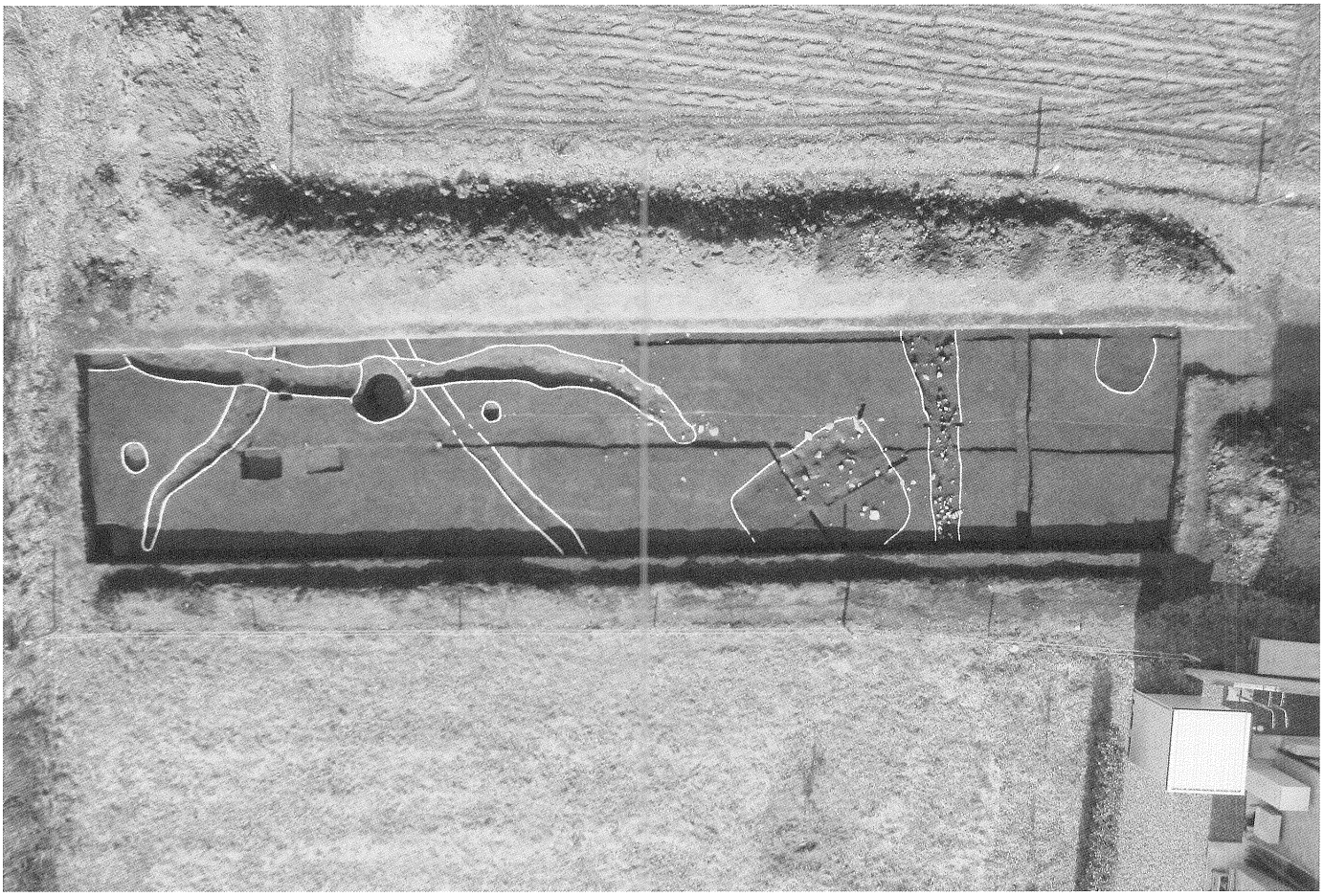
Ⅵ　まとめ

今回の発掘調査にて確認された遺物包含層からは、弥生時代中期後半の土器が多く含まれていた。包含層の形成要因は、調査区西側に発達しているであろう谷地形に伴い堆積したものであると考えられる。器種は、壷・甕・高坏・甑・鉢で、なかでも甕片が比較的多く、次いで壷片である。赤彩された高坏片は少量であが、図示したものを含め、数個体分の破片が認められた。甑及び鉢は図示した 1 個体のみであると考えられる。遺物は、小破片のものから個体の約 5 分の 1 程の大きなものまであり、それらほとんどが、断面部分に摩滅が認められず、比較的鋭利であった。分布は、層厚が厚くなる調査区西端に多く出土する傾向にある。また、近距離での接合関係が認められることから、これらの遺物の供給源である遺構が、極近接した地点に存在するものであると推測される。包含層遺物と同時期の遺物が出土したのが 4 号溝である。底部には砂層が確認され、流水があったことを証明している。溝は南から北に緩やかに傾斜し、水は北側に向かって流れている。出土した遺物は、壷・甕・高坏で、包含層同様に断面部分は摩滅が少ない。この為、流水により遠距離から運ばれたもではなく、近距離からの混入であると推測される。調査区内全体から弥生時代中期後半の遺物が検出されているが、上記の 2 遺構からの出土が特に顕著である。

1986 年に調査され、弥生時代中期後半の遺構が確認された大八木富士廻り遺跡が北西約 130 m と近接した地点にあり、今回の調査結果をふまえると本遺跡の北側が集落域であったと推測されるが、4 号溝が北側に傾斜しており、遺物は南側からの流れ込みであると考えられる為、本遺跡の南東側にも集落が広がっている可能性が示唆される。今回の発掘調査により、当該地周辺が弥生時代中期後半の集落域であるとが推測され、沖積地域内における微高地での集落の一部を確認することができたのは貴重な発見であり、その全容については今後の調査研究に委ねたい。

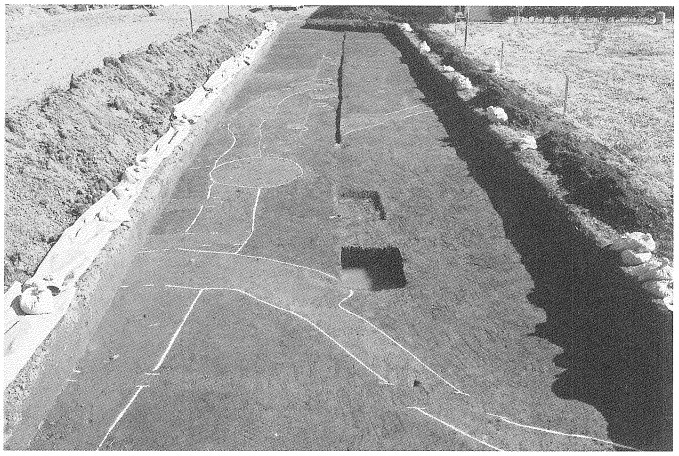
写 真 図 版

調査区遠景

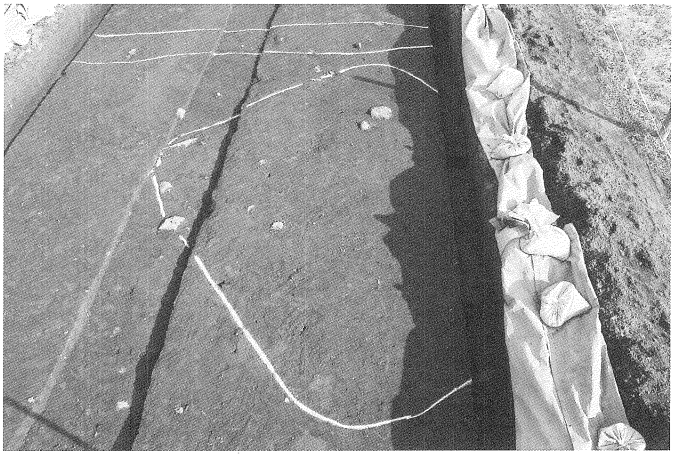


調査区垂直全景　上が北

表土除去状況

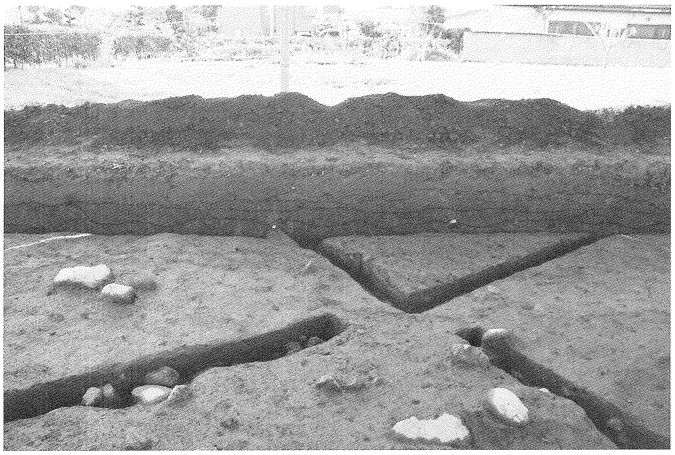


遺構検出状況　西から



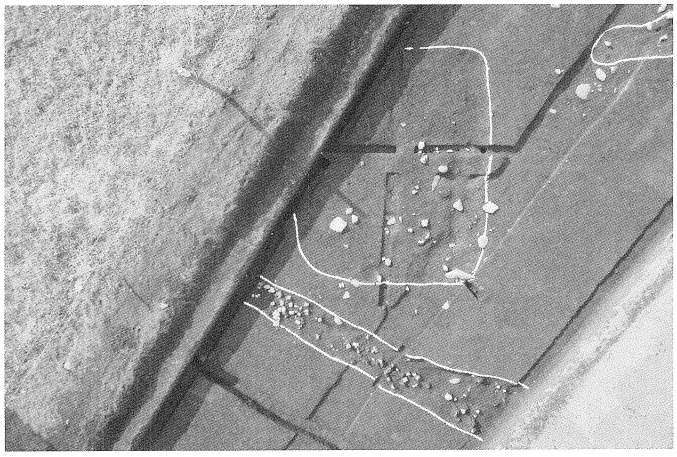
竪穴状遺構確認状況　西から

竪穴状遺構セクション　南西から

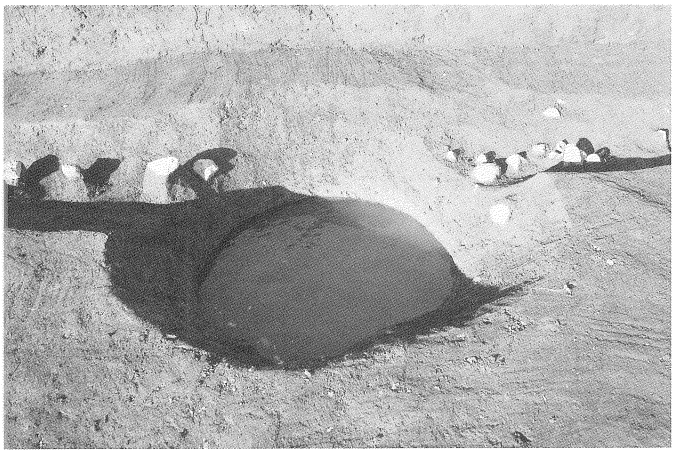


竪穴状遺構南壁セクション

竪穴状遺構完掘全景　南西から

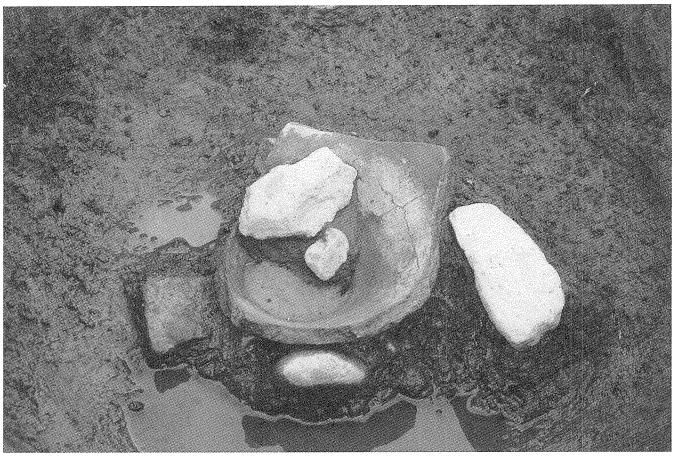


竪穴状遺構全景　垂直

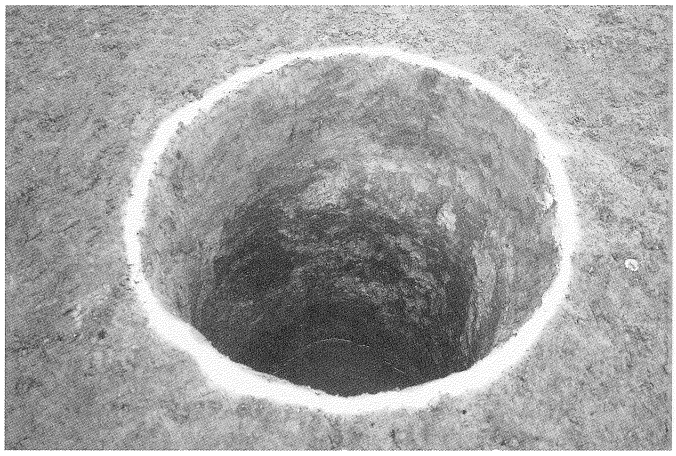


1号井戸全景　南から

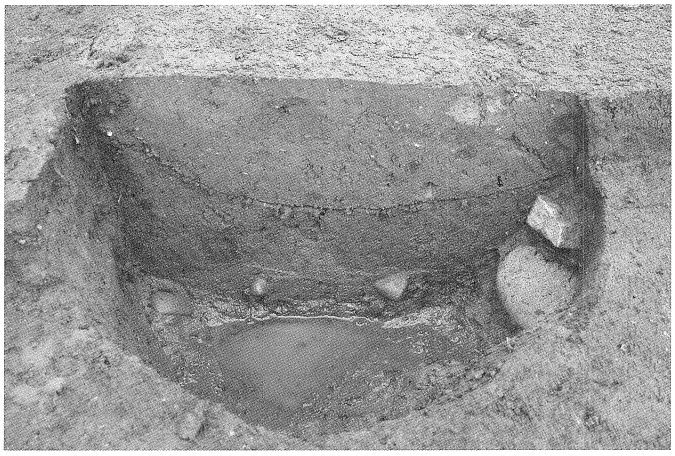
2号井戸セクション　南西から



2号井戸遺物出土状況　南西から



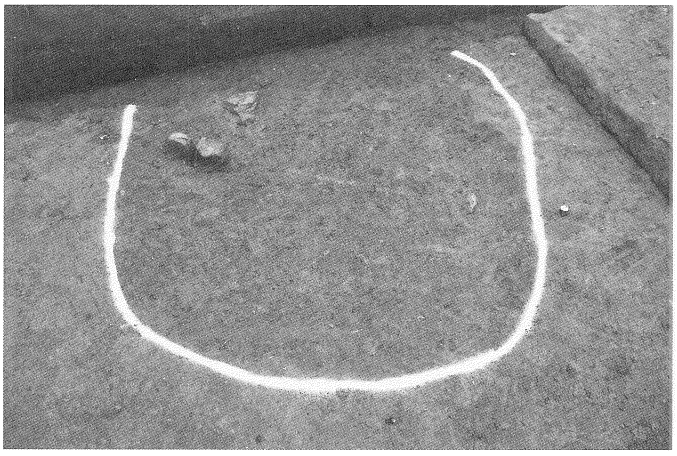
2号井戸全景　南西から



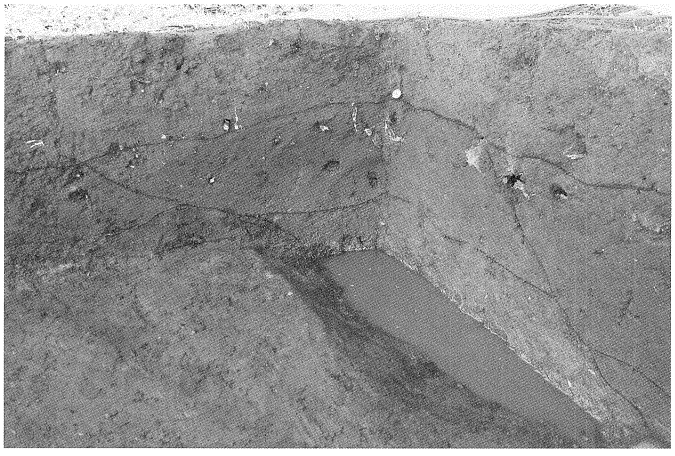
1号土坑セクション　南から

1号土坑全景　南から

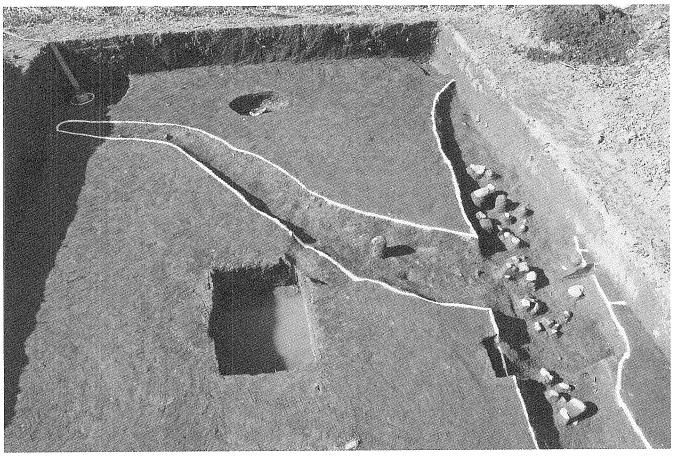
2号土坑セクション　南西から



2号土坑全景　南から

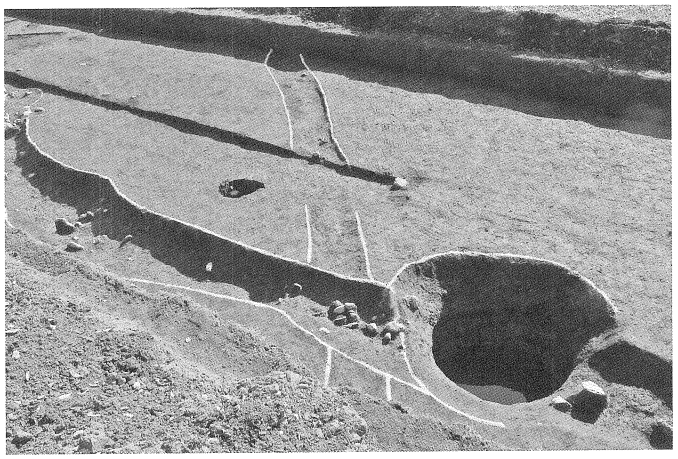


3号土坑セクション・全景　東から

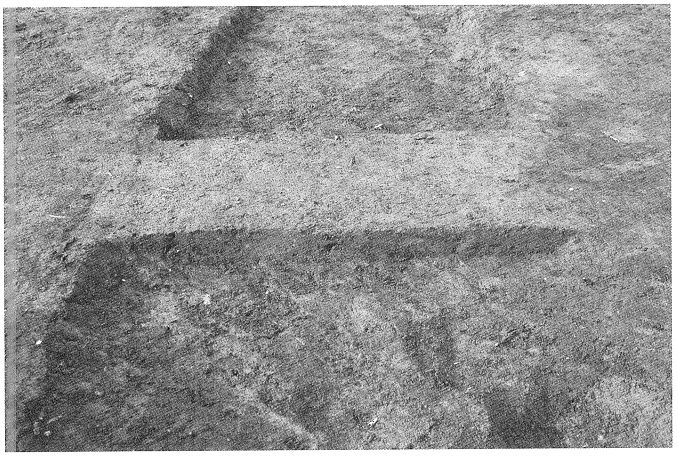


1号溝全景　東から

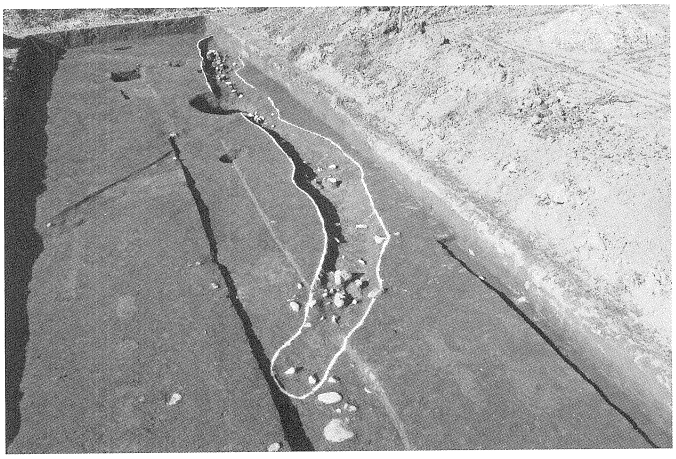
1号溝セクション　南から



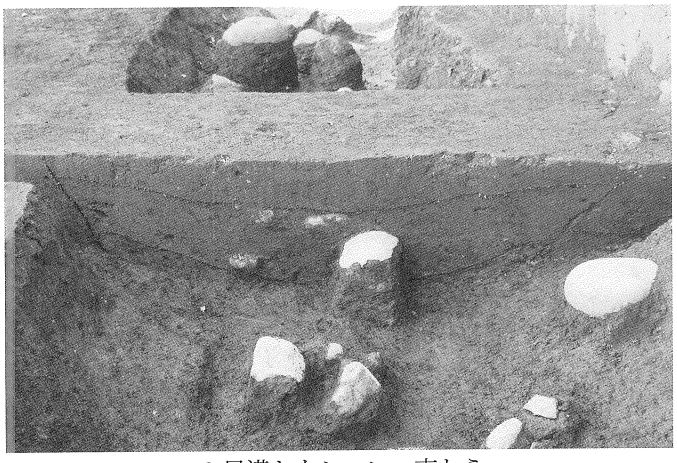
2号溝全景　北から



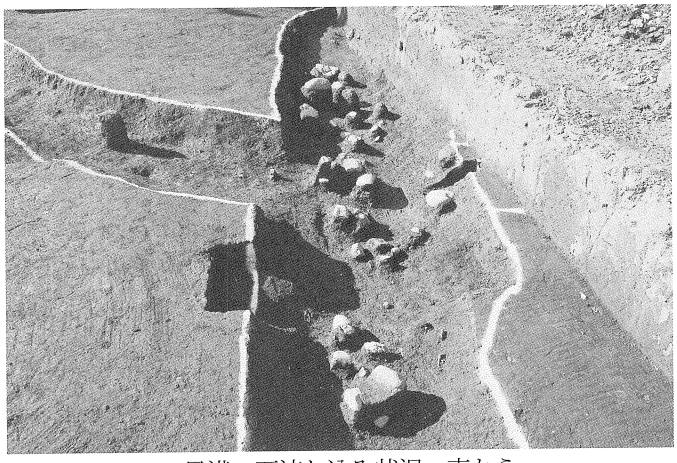
2号溝セクション　南から



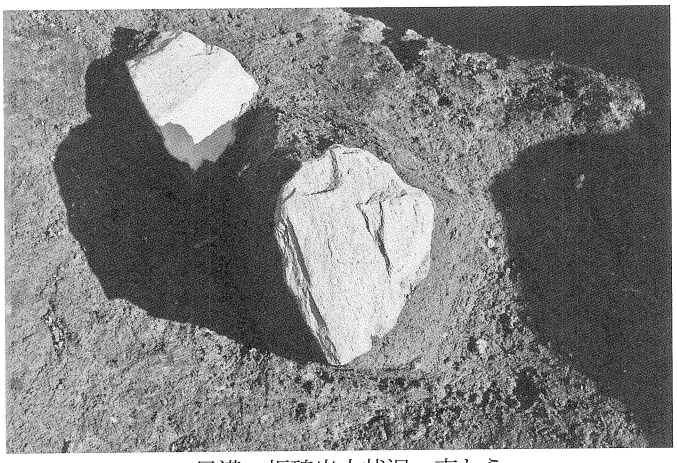
3号溝全景　東から



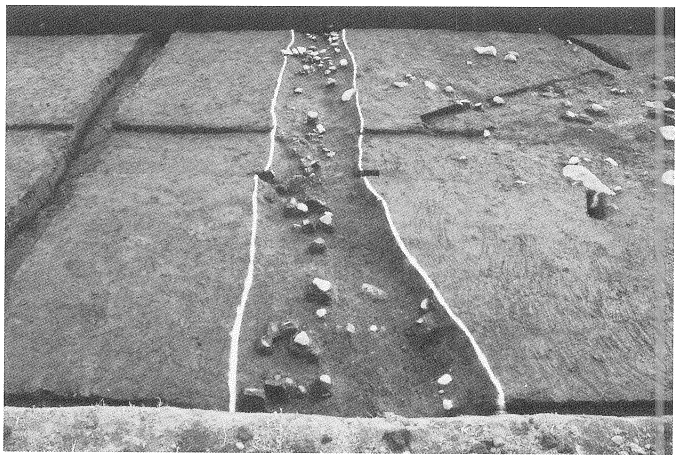
3号溝セクション　東から



3号溝　石流れ込み状況　東から



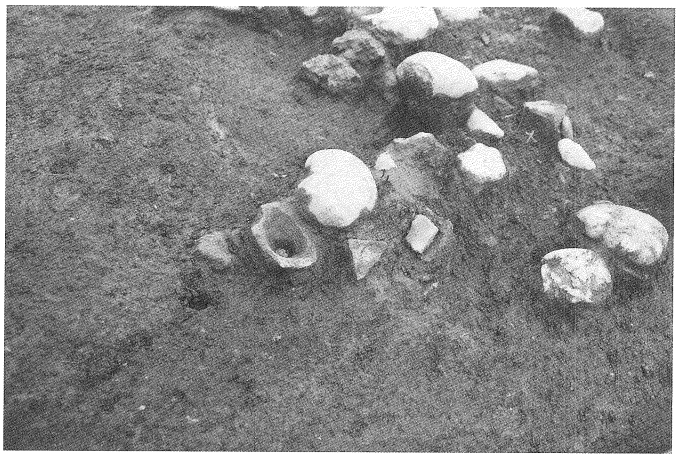
3号溝　板碑出土状況　南から



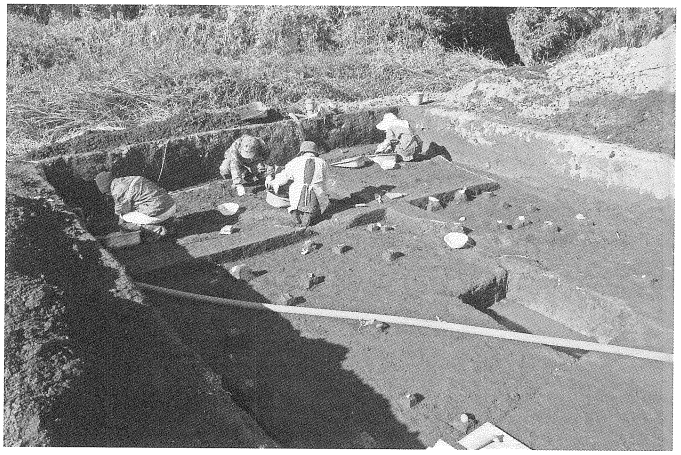
4 号溝全景　南から

4 号溝セクション　南から

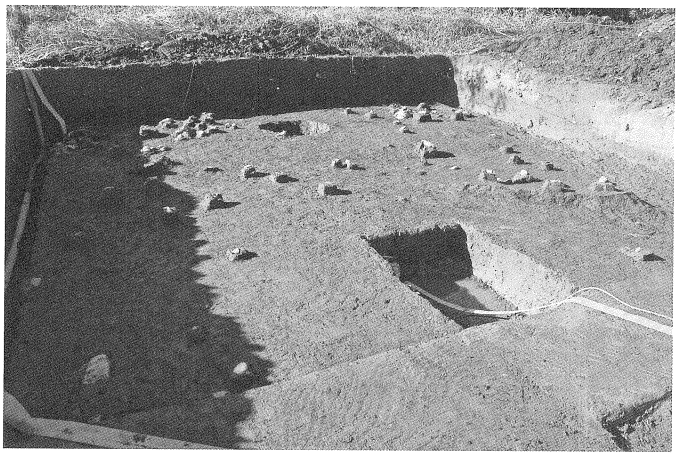
4 号溝遺物出土状況



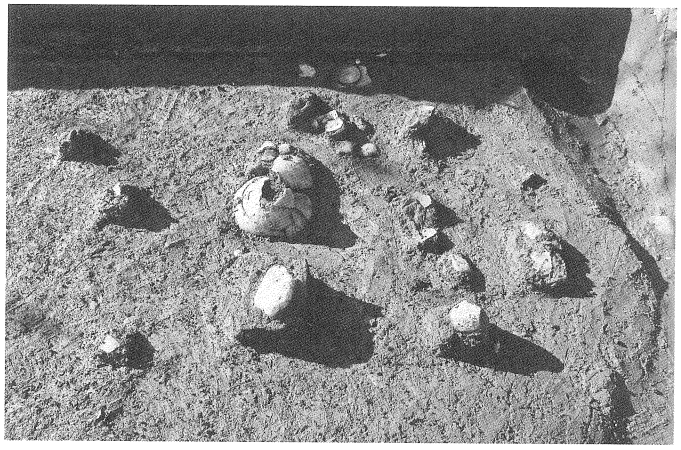
4 号溝遺物出土状況



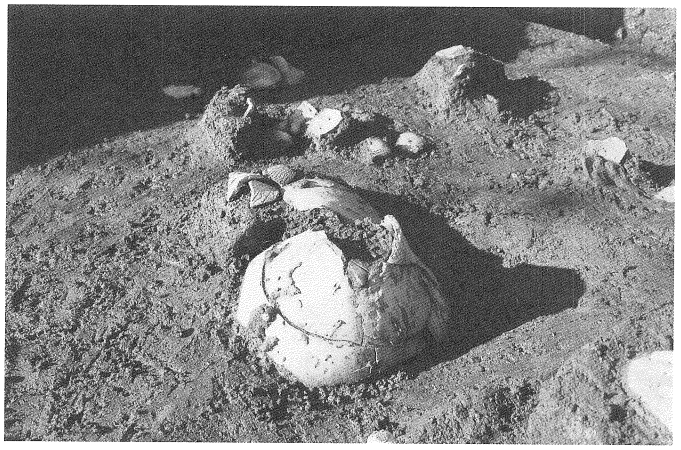
作業風景



包含層遺物出土状況　東から



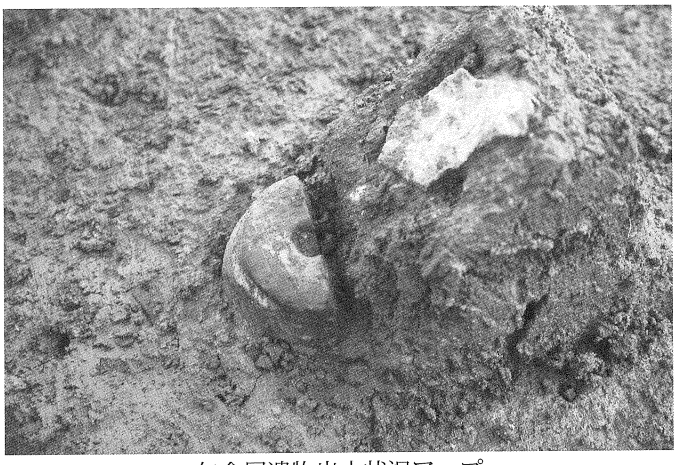
包含層遺物出土状況アップ　東から



包含層遺物出土状況アップ　南西から

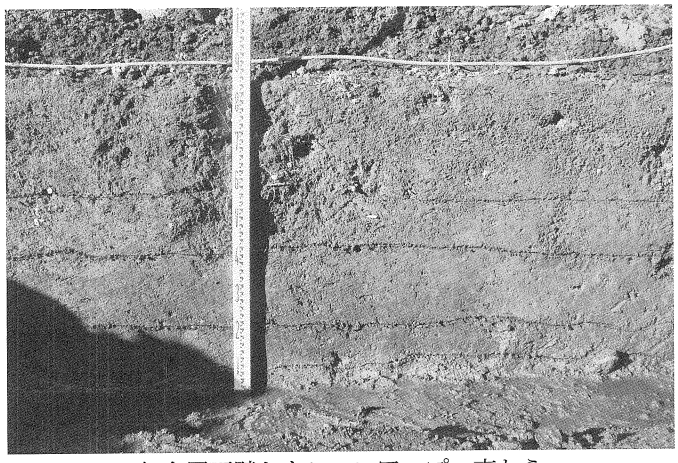
包含層遺物出土状況　北上から

包含層遺物出土状況アップ

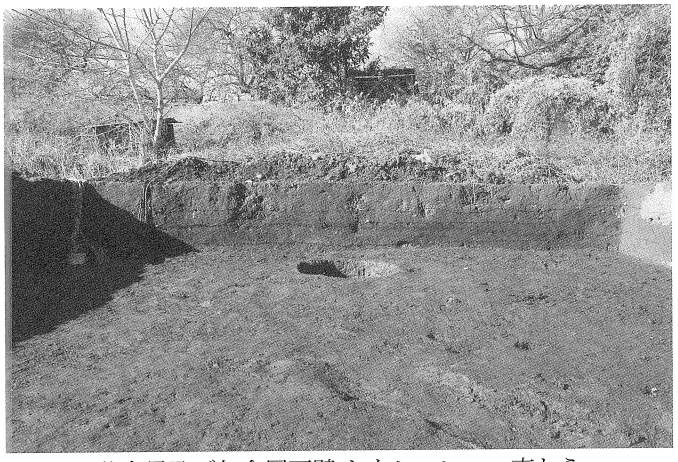


包含層遺物出土状況アップ

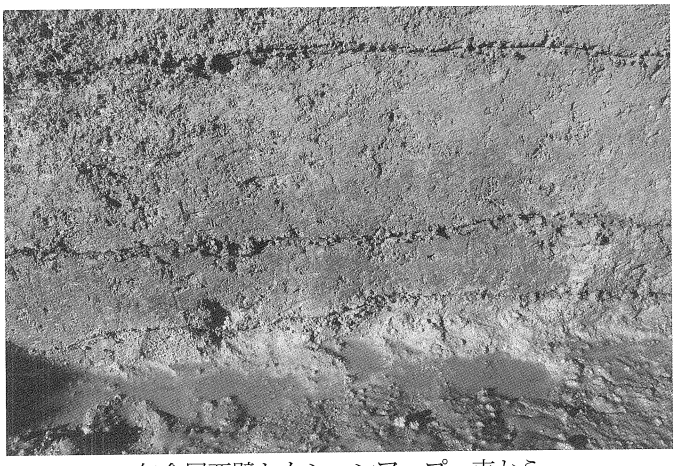
包含層遺物出土状況アップ



包含層西壁セクションアップ　東から



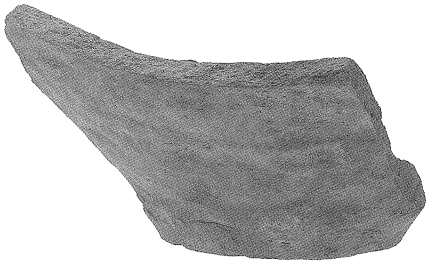
谷全景及び包含層西壁 セクション　　東から



包含層西壁セクションアップ　東から

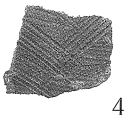
埋め戻し状況　東から

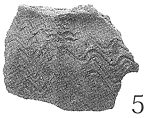
PL.7


1

2

3


4

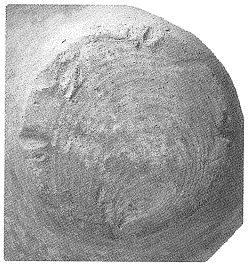

5

6

7

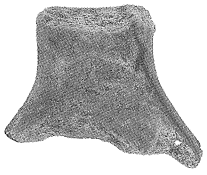
8

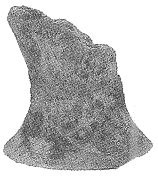
9

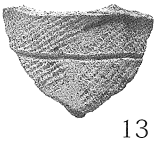


15

10


11


12

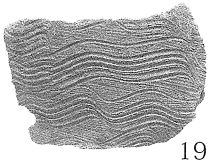

13

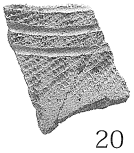
14

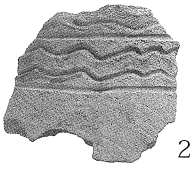
16

17

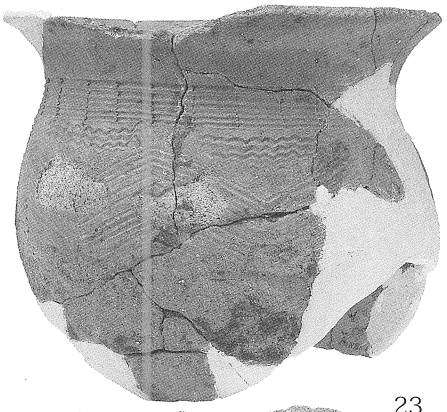
18


19

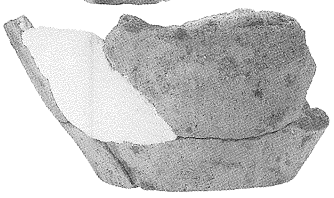

20

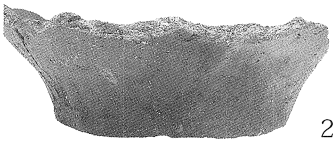

21

22

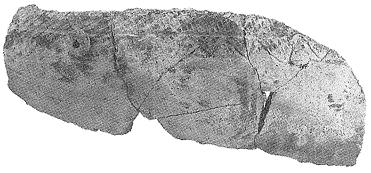

23

24




25

26


28

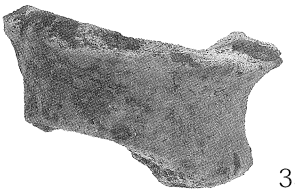
27

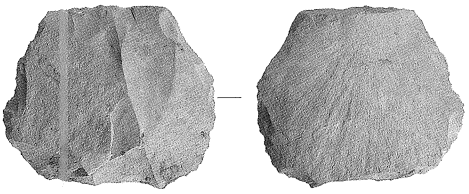
29

30

31

32

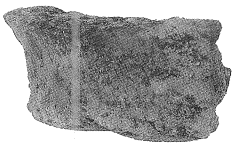

33


34

35

36

38


37

39

参考文献

群馬県史編さん委員会　1990『群馬県史　―通史編１原始古代１―』群馬県
中世土器研究会　1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
高崎市市史編さん委員会　1996『新編 高崎市史 資料編３ 中世Ⅰ』高崎市
笹沢浩　1996『栗林式土器』「日本土器辞典」雄山閣
若狭徹　1996『群馬県地域』「YAY！（やいっ！）」弥生土器を語る会
高崎市教育委員会　1998『高崎市遺跡分布図』高崎市内遺跡詳細分布調査報告書　高崎市教育委員会
高崎市市史編さん委員会　1999『新編 高崎市史 資料編１ 原始古代Ⅰ』高崎市
高崎市市史編さん委員会　2000『新編 高崎市史 通史編２ 中世』高崎市
高崎市市史編さん委員会　2000『新編 高崎市史 資料編２ 原始古代Ⅱ』高崎市
水谷貴之　2010『大八木・伊勢廻遺跡２』文化財調査報告書第271集　高崎市教育委員会

フリガナ	イイヅカ・カイザワホリソイ　イセキ
書名	飯塚・貝沢堀添遺跡
副書名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第284集
編著者名	有限会社 高澤考古学研究所　澤田 福宏
編集機関	高崎市教育委員会
編集機関住所	〒370-8501　群馬県高崎市高松町35番地１　電話027-321-1111（代）
発行年月日	2011年4月30日

所収遺跡名	飯塚・貝沢堀添遺跡						
所収遺跡所在地	群馬県高崎市飯塚町字貝沢堀添293番地１						
市町村コード	遺跡番号	北　緯	東　経	調査開始	調査終了	調査面積	調査原因
102020	494	36°20′46″	139°00′14″	20101115	20101217	187.56㎡	集合住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯塚・貝沢堀添遺跡	集落	弥生時代	竪穴状遺構１基 土坑１基 溝１条 遺物包含層	弥生土器	谷地形に形成された弥生時代中期後半の遺物包含層
		中世	井戸２基 土坑２基 溝３条	軟質陶器	

— 飯塚・貝沢堀添遺跡 —
高崎市文化財調査報告書第 284 集

平成 23 年 4 月 25 日　印刷
平成 23 年 4 月 30 日　発行

編集・発行　高崎市教育委員会
印刷・製本　朝日印刷工業株式会社